ネーフスキイ通に優るところは何處にもありはしない、少くともペテルブルグではさうである。この街はペテルブルグにとつては一切なのだ。都の花ともいふべきこの街はありとあらゆる光輝を備へてゐる。私はたしかに知つてゐるが、この都に住んでゐる蒼白い顔をした官吏などでも、如何なる地上の幸福を約束されたとて、ネーフスキイ街を見棄てるやうなものは誰一人ないだらう。年齒およそ二十五歳、立派な口髭と素ばらしい仕立のフロックを着たやうな人達は云ふまでもなく、頤鬚に白いものが交り、頭が銀の皿のやうにつるつるになつた連中でさへ、ネーフスキイ通には夢中なのである。ところで御婦人がたは？　勿論、御婦人がたに取つては、ネーフスキイ通は尙さら愉しいに決まつてゐる。またこれが愉しくないなどと云ふものが何處にあらう？ネーフスキイに一歩ふみ込むが早いか、もう早速享樂の匂ひがしてくる。なにかのつぴきならぬ用事をかかへてゐる人間でも、ここへ踏み込むや否や、そんなものは一切忘れてしまふ。ここそ人間が用事以外のことで姿を見せる唯一の場所だ、ここへはペテルブルグ全體を摑んでゐる商業上の利害關係や、その他の要件に追ひ立てられて來ることはない。恐らくネーフスキイ通で行き會ふ人は、モルスカヤ、ゴローホヴヤ、リテイナヤ、メシチャンスカヤその他の街々を歩いてゐる人達ほど、利己主義ではなささうである。さういつた街になると、歩いてゐる人にしても、箱馬車や辻馬車を飛ばしてゐる人にしても、貪婪、强慾、困窮の相が顏にあらはれてゐる。ネーフス

キイ通はまたペテルブルグ全市の通信機關である。ペテルブルグ區とかヴィボルグ區などに住んでゐて、ペスキイなりモスクヴ見附なりにゐる友達に何年も會はなかつたやうな人でも、ここへ來れば必ずその友人に會へるといふ確信を持つて差支へない。どんな住所錄でも照會事務所でも、ネーフスキイ通ほど正確な情報を提供してはくれないのだ。まことに全能のネーフスキイ通よ！　遊樂の機關に乏しいペテルブルグにあつて唯一の氣晴らしの場所だ！　その兩側の歩道は何と淸潔に掃除されてゐることか、ああ、何と夥しい人がその上に足跡を殘してゆくことか！　その重みのために石甃みの花崗石も鯱われるかと思はれる退役兵士の無細工な泥靴、向日葵の花が太陽の方へ向くやうに、商店の美々しい飾窓へ首を向ける若い貴婦人の、煙の様に輕い可愛いハイヒール、希望に充ち溢れてゐる見習士官の、歩道にくつりきと痕をつけて行くサーベル、――何もかもがこの通りに力の威力か、さもなければ弱さのちからの捌け口を見いだすのだ。僅か一日のうちに廻り燈籠のやうな目まぐるしさで、さまざまな影像が如何に限りなく閃き過ぎることか！　一晝夜のあひだに何といふ烈しい變化が行はれることだらう！

まづ早朝から始めよう。ペテルブルグ全市に燒き立ての熱いパンの匂ひがして、敎會や慈悲ぶかい通行人を狙つて押しかけるぼろ着物にぼろ外套の老婆が街々をみたす。さういふ時分には、ネーフスキイ通はがらんとしてゐるのだ。でつぷり肥つた商店の主や手代は、まだ和蘭麻の肌着を

きたまま睡つてゐるかお上品な頰つぺたに石鹼を塗つてゐるか、それともコーヒイを飲んでゐる。乞食共は喫茶店の戸口に集まる。すると、昨日チョコレートを手に持つて蠅のやうに飛び廻つてゐたガニメデス*が、さも眠たさうに、ネクタイもしめないで箒片手に出て來て、固くなつた肉饅頭や食ひあましを投げてやる。どこの街にも用事で急ぐ人達が右往左往しはじめる。時には、仕事に出かけたロシヤの百姓が通を横切つて行くが、その長靴は石灰で眞白に汚れて、水のきれいなので有名なエカテリーナ運河でさへも、こいつを洗ひ淸める事は出來まいと思はれる程である。かういふ時刻に、御婦人がたが出歩かれるのは身分にかかはらうと云ふものだ。なぜならロシヤの大衆は好んで思ひ切つた言葉づかひをしたがるもので、それは恐らく淑女方が芝居でさへ聞かれたことがないやうな種類のものである。どうかすると、寢ぼけ面をした役人が折鞄を小脇にかかへて、とぼとぼと歩いて行く、もしネーフスキイ通が役所へ行く道筋に當つてゐたらば、である。この刻限、つまり十二時までのネーフスキイ通は、誰に云はせても目的ではなくて、ただの通り路にすぎない。この通は次第々々に、自分々々の仕事なり、心配事なり、腹の立つ事なりを持つた人で充たされて行くが、それらの人々は決してネーフスキイ通そのもののことを考へはしない。ロシヤの百姓は十コペイカ玉がどうしたとか、七枚の二コペイカ玉がどうした

* 希臘神話のゼウスに盜まれてその小姓となつた美少年、こゝでは給仕のこと

などと云ふ話をしてゐるし、老人や老婆は兩手をふりまはしながら獨り言を云つたり、時にはかなり大袈裟な身振りさへするのだが、誰一人そんなことに耳を假すものもなければ、笑ふものもない。ただ縞木綿の部屋衣を着て、空の酒壜かそれとも出來上りの長靴を持つて、ネーフスキイ通を稻妻のやうに駈けて行く小僧が例外なくらゐであらう。この時刻には人が何を着てゐようが、たとへ中折帽の代りに兵隊帽を頭に被つてゐようが、カラがネクタイの上に大きく拔け出てゐようが、そんなことに氣のつくものはないのだ。

十二時になると、精麻（パチスト）のカラをつけた教へ兒を引きつれた、國籍のまちまちな家庭教師が、ネーフスキイ通に侵入してくる。英吉利のジョンスだとか佛蘭西のコックだのといふ連中が、父親代りとして薫育を賴まれた教へ兒の手をひいて歩きながら、お上品なものものしい態度で、看板といふものは店の中に何があるかを知らせるために出しておくものだ、などと說明して聞かせる。女の家庭教師たち、蒼白い顏をしたミスや薔薇色の頰のマドモアゼルは、身輕なお轉婆のお孃さまの後からしづしづと歩きながら、もちつと左の肩を上げて體をまつすぐになさい、などと注意してやる。手短かに云ふと、この時刻のネーフスキイは教育通ともいふべきである。けれども、二時近くなるに從つて、家庭教師や教育家や子供の數は次第に減つて、つひには色樣々なけばけばしい服裝（なり）をした神經質の夫人と腕を組んだ、やさしいパパさんに追ひのけられてしまふ。だんだ

んとそのお仲間に、かなり重大な家事を濟した人達が加はつて來る。つまり、かかりつけのお醫者と時候の挨拶をして、鼻の先に出來た小さな吹出物の話をした人、持馬や子供の健康を訊ね、子供が大した天分を示したと聞いて滿足した人、新聞の廣告や重大記事を讀んで、名士の去來を知つた人、それから最後には、コーヒイなりお茶なり飲んだ人などである。やがてまた、美むべき運命の祝福を受けて、特務官吏の肩書を頂戴した連中も加はる。するとまた更に、外務省に勤めて、仕事も上品なら身のこなしも垢拔けのした人達が仲間入をする！　ああ、世の中には何と素ばらしい勤務先があり、勤め口があることか！　さういふ勤めをしてゐると、精神が高尙になり、心が和らぐといふものだ！　しかし殘念ながら、私は勤務をしてゐないので、上役の微妙な應對ぶりに接する滿足を奪はれてゐる。

とまれ、ネーフスキイで目に入るものは、すべて悉く上品で作法にかなつてゐる。男は長いフロックを着て、兩手をポケットに入れてゐるし、婦人方はあるひは薇薔色、あるひは薄色、あるひは水色の繻子の上衣をまとひ、洒落た帽子をかぶつてゐる。ここでは並々ならぬ技巧をもつてネクタイの下に潛らした頰髯、ほかに類のない頰髯に出會ふだらう。それは黑貂のやうに、炭のやうに眞黑で、繻子のやうな、天鵞絨のやうな光澤のあるしろものなのだが、しかし、殘念なるかな、それはただ外務省に勤めてゐる役人だけの專有なのだ。その他の省に勤めてゐる連中は、

神様から黒い頬髭を授けて貰へなかつたのである。そこで彼等は、我ながら不愉快千萬にも、赤茶けたやつをつけて歩かなければならない。ここでは如何なる筆にも言葉にも盡されぬ見事な口髭に出會ふだらう。それこそ生涯の前半を捧げた髭であり、長いあひだ夜も晝も心を碎いて手入れを盡した髭である。うつとりする程いい薫りの香水をふりかけ、飛切り上等の世にも珍らしいポマードを塗つた髭であり、夜寢るときは薄い丈夫な紙に包んでをく髭である。持主の心から愛着措くあたはざる髭であり、道行く人の羨望に堪へない髭である。幾千といふ種類をつくした色さまざまな輕々とした帽子、着物、ハンカチ、その中にはどうかすると、まる二日間くらゐ持主が愛着の念を抱きつづけるやうなのもある、――かういつたものはすべて、ネーフスキイを歩く如何なる人の目をも欺たすことが出來るのだ。それはさながら數知れぬ蝶の大群が一時に草の莖から飛び立つて、輝かしい一團の雲かと紛ふばかり、黒い甲虫のやうな男子群の上を搖曳するかのやう。ここではまた、かつて夢にも見たことのないやうな細腰に出會ふことがある。ほつそりした華奢な腰で、どう見ても壜の口以上には太くない、そんなのに出會ふと、うつかり無躾けに肘など突き當てたりしないやうに、恭々しくわきの方へ退かずにゐられない。息をつくのでさへちよつと注意を缺いたら、世にも麗はしい自然と藝術の作品を毀しはしないかと、恐怖と臆病心の發作に胸が痺れる思である。又ネーフスキイ通では何といふ見事な袖を見かけることか！　あ

あその美しさ！　それは幾らか二つの風船に似てゐるので、もしつれの男が支へてゐなかつたら、當の御婦人がとつぜん空中に舞ひ上りはしないかと思はれる程である。といふのは、女もシャンパンを充たした杯を口へ持つて行くやうな具合に、輕々とこころよく宙に持ち上げたくなるからである。ネーフスキイ通ほど、出會つた人々が上品にしかも自然に會釋を交すところは外にない。ここでは外にまたとない、藝術の粹とも云ふべき微笑みを見受けることが出來る。それは時には、滿足のあまり溶けてしまひさうな微笑みであり、時にはこちらが草の葉よりも卑しいものやうな氣がして、おもはず頭を下げてしまふやうな微笑みであり、また時には自分が海軍省の尖塔の鑓よりも高いものに思はれて、昂然と頭を反らすやうな微笑みである。ここではまた並並ならぬ品位を籠め、しかも自己の尊嚴を感じさせるやうな調子で、音樂會や天氣模樣の話をしてゐる人達を見かけるだらう。ここでは幾千となき不可思議な現象や、理解を絶した性格に出くわすだらう。ああ、實にネーフスキイ通では、なんといふ奇妙な性格の連中に行き當ることか！

かういふ連中がたくさんゐる。彼等は人に出會ふと必ず相手の靴を見て、通り過ぎると振り返つて、人の服の背後を眺めるのだ。私はいまだにどうしてそんなことをするのか合點が行かない。はじめ私はこの連中を靴屋かと思つたが、なかなか、どうして、彼等は概ねさまざまなお役所に勤めてゐて、一つの省から別の省へ宛てた文書を立派に書いてのけるやうなのさへ尠くな

い。さもなければ、散歩したり、方々の喫茶店で新聞を讀んだり、そんなことを仕事にしてゐる連中で、要するにれつきとした人達なのである。午後の二時から三時といふ時間は、ネーフスキイが移動展覽會と化する祝福されたる時で、そこには人間のつくり出した美しい作品が殘りなく繰り展げられるのだ。上等の海狸の襟のついた洒落たフロックをひけらかすものがあるかと思へば、見事なギリシヤ鼻を突き出してゐるものもある。堂々たる頰髯を生やしてゐるものがあるかと思へば、可愛い双の瞳と素ばらしい帽子を展觀してゐる婦人もある。華奢な小指に咒文入りの指環を嵌めた男もあれば、ふるひつきたいやうな靴を穿いた可愛い足をこれ見よがしにしてゐる女もある。人をあつと云はせるやうなネクタイをしめたものがゐるかと思へば、人の目をまはさせるやうな口髭を生やしたものもゐる。けれども三時が打つと、展覽會もそろそろ終をつげて、群衆は次第にまばらになる……

三時には新しい變化が起る。ネーフスキイ通には不意に春がやつて來て、綠色の制服を着た官吏でいつぱいになる。おなかを空かした九等官や七等官その他の役人どもが、足を早めてすたこらと歩いてゐる。若手の十四等官や十二等官あたりは、まだ餘暇を利用してネーフスキイをぶらつかうと云ふ野心があるので、お役所に六時間も鑵詰になつてゐた人間ではないみたいな威張つた格好をしてゐる。しかし年とつた十等官や九等官、ないし七等官などになると、頭を垂れて足

早に歩いてゐる。この連中になると、往き來の人を眺めて樂しむなどといふ餘裕はない。彼等はまだ十分に自分の仕事から解放されてゐないので、頭の中は混沌として、手はつけたけれどまだ片づかない事務が一杯つまつてゐる。で、彼らの目の前には何時までも商店の看板の代りに書類の入つた紙挾みか、さもなくば課長の肥つた顏がちらついてゐるのだ。

四時過ぎになると、ネーフスキイ通はがらんとして、役人の姿はほとんど一人も見かけなくなる。ただ何處かの店から出て來たお針娘が、手に箱をぶら下げて往來を突つ切つて行く位なものである。慈悲心に富んだ書記長の餌食にされて、粗末な毛織(アリーズ)の外套一枚で路頭に迷つてゐる男、いま何時(なんじ)だらうとお構ひなしの氣紛れなお上りさん、手提袋(リヂキュール)に書物を持つた痞せてひよろ長いイギリス婦人、背中にバンドのある半綿半毛の上着をきて、細い頤鬚を生やし、年中おちつきのない遣りくり生活をしてゐるロシヤ人の組合員、これは行儀よく舗道を歩いてゆく時、背中も兩手も脚も、どこもかしこも細かく慄へるのだ。そのほかどうかすると、背の低い職人……と云つたやうなところで、それ以外この時刻にネーフスキイ通で見かけるものは誰もないのである。

けれども、黄昏の影が家々や街路に落ちかかつて、蓙をかぶつた火の番が、燈火(あかり)をつけに梯子を上つてゆき、商店の低い窓々に晝間は憚りのある版畫が現はれる頃ともなれば、ネーフスキイ通は再び活氣を呈し、ざわざわと色めいて來る。その時こそ、ラムプが誘惑にみちた魔法の光を

すべてのものに投げかける、かの神祕めかしい時が訪れて來るのである。やがて暖かさうなフロックや外套を着込んだ若い人達が、やたらに大勢あらはれて來る。多くは獨身者なのだ。このときネーフスキイ通りには、何か知らある目的が感じられるやうになる。と云ふより、目的に似たあるもの、何かしら極めて漠とした何物かが感じられるのだ。人々の足どりはせかせかと早まり、しかも概して不揃ひになる。ひよろ長い影が家々の壁や車道の上にちらつき、頭の先がほとんど警察橋（ポリツエイスキイ・モスト）まで屆きさうである。若手の十四等官や十二等官はいつまでもぶらぶら歩き廻つてゐるが、年とつた十四等官や九等官、七等官などは概ね自分の家に納まつてゐる。といふのは、彼らが女房持ちであるか、さもなくばドイツ女の女中がうまい料理をつくつてくれるからである。ここでは、午後二時頃さも豪さうに、驚くばかりお上品に取りすましてネーフスキイ通を散歩してゐた年輩の紳士連に、又ぞろ出くわすだらう。いま見ると、彼等は若い十四等官と同じやうにちよこちよこ駈けまはつて、遠くから見つけた化生の女を帽子の下から覗いて見ようと焦慮つてゐる。この種の女の紅をつけた厚い唇や、白壁のやうに白粉をつけた頬は、通をぶらついてゐる多くの男の御意に召すのだが、わけても番頭だとか、組合員だとか、商人だとか、いつもドイツ風の上着をきて、たいてい腕を組み合せながら群をなして歩いてゐる連中に好かれるのである。

「おい、一寸！」とこの時ピロゴフ中尉は、一緒に歩いてゐた燕尾にマントといふ扮裝（いでたち）の青年の

手をぐいと引いた。「見たかい？」

「見た、實にすてきだ、まるでペルヂノのビアンカだ。」

「いつたい君はどつちの方を云つてるんだい？」

「あつちの方さ、ほら、あの髪の毛の黒い方さ……それに何て眼だらう！　ほんとに何て眼だ！全體の均整、輪廓、それに顏の線、――奇蹟だ！」

「俺はあの女の後から向うへ行つたブロンドのことを云つてるんだよ。どうして君はそのブルュネットをつけて行かないんだ、そんなにお氣に召したのなら？」

「とんでもない、どうしてそんなことが出來るものか！」と燕尾服の青年は赤くなつて叫んだ。

「まるであのひとが、夜ネーフスキイ通を徘徊する女か何ぞのやうにさ。あれはうんと身分の高い婦人に相違ないよ。」と彼は溜息を一つついて云つた。「あのマントだけでも八十ルーブリの値打はあるよ！」

「このお人好し！」とピロゴフは、女の華やかなマントの飜つてゐる方へ、むりに相手を突きやりながらかう叫んだ。「早く行かんか、間抜け、はぐれつちまふぞ！　ところで、俺はブロンドの方をつけて行く。」

二人の友達は左右に別れた。

『ふん、こつちはお前たちなんかぴんからきりまで知りぬいてるんだぞ。』 如何なる美形といへども、自分に楯つくものはあり得ないと自信滿々のピロゴフは、思ひ上つた自己滿足の微笑を浮べて、肚の中でこんなことを考へるのであつた。

燕尾服にマントの青年は、臆病げな慄へがちの足どりで、遙かに派手な婦人マントの飜つてゐる方へ歩き出した。マントは街燈の光に近づくにつれて色鮮かに耀き立つかと思へば、又そこから遠ざかると忽ち闇につつまれるのであつた。青年の胸は早鐘を打つた。彼はおもはず足を早めた。彼は遠ざかり行く美女の注意を惹くだけの資格があらうとは、夢にも考へなかつた。ましてピロゴフ中尉の仄めかしたやうな怪しからぬ野心は、露ほども持つてはゐなかつた。彼はただ家がつきとめたかつたのである。いきなり天上からネーフスキイ通へ落ちて來て、またいづくとも なく飛び去るに相違ないあの麗人が、どこに住んでゐるかを知りたかつたのである。彼は飛ぶやうに道を急いだので、半白の頰髯を生やした堂々たる紳士を、のべつ歩道から突きとばすのであつた。

この青年は我國でかなり奇妙な現象となつてゐる階級に所屬してゐた。といふのは、我々の夢に現はれる人物が現實世界に屬してゐるといふのと同じ程度に、彼はペテルブルグの市民仲間に屬してゐるのであつた。それは誰も彼もが官吏でなければ商人、でなければ職人と云つたやうな

町では、極めて風變りな特殊階級なのだ。つまり彼は畫家なのである。事實、ペテルブルグの畫家は奇怪な現象ではあるまいか？ 雪國の畫家、曾てフインランドであつた土地の畫家、何もかもがじめじめし、のつぺりと平板單調で、色褪せて、灰色の霧に閉ざされた地方の畫家！ さうした畫家はイタリヤの畫家達には凡そ似ても似つかぬのだ。彼等はイタリヤとその空のやうに熱烈で誇が高いけれども、これはその反對に、概ね善良で、おとなしく、內氣で、暢氣で、しづかに己れの藝術を愛し、小さな部屋で二三人の友達と茶を飲みながら、つつましやかに好きな話題を語り合ひ、そのほかのことにはとんと無頓着な連中である。この手合は年ぢゆう乞食婆さんか何かを呼んで來て、まるまる六時間も坐らせて、何の表情もないみじめな顏つきをカンヴスに移すのだ。彼等は如何にも繪描きらしいがらくたのつまつてゐる自分の部屋を畫題にする。——時代と埃でコーヒイ色になつた石膏の腕や足、 こはれた畫架、ひつくり返しになつたパレット、ギターを彈いてゐる友人、繪具で汚れた壁、あけ放した窓、その向うにちらちら見える白々としたネヴの流れや、赤いルバシカを着た貧しい漁夫、といつたやうな具合で、彼等の畫面にはほとんど何時も灰色のどんよりした色調が支配してゐる、——消すに消されぬ北國の烙印である。

それにも拘らず、彼等は心から愉しく自分の仕事に精進してゐる。その多くは眞の才能を育くんでゐるので、もし爽かなイタリヤの空氣に當つたら、ちやうど室內から外氣の中へ出して貰つ

た植木のやうに、のびのびと自由に、目ざましい生長を遂げたに相違ない。彼等は概ね臆病である。勲章だとか堆高く盛り上つた肩章を見ると、忽ちおどおどしてしまつて、我ともなしに自作の値段を負けてしまふ。彼等も時としては洒落て見るのが好きだけれども、そのお洒落はあまり目に立ちすぎて、何だか着物に補布でも當つてゐるやうな感じである。彼等はどうかすると素ばらしい燕尾服の上に汚れたマントを着たり、高價な天鵞絨のチョッキに繪具だらけの上衣をつけたりしてゐるところを見かける、――それは丁度、時として彼等が描きさした風景畫の上に、ニムフの姿を逆さに素描してゐるのを見受けるのと同じわけである。これはほかに描くところがないので、かつては樂しみながら描いたものながら、今は畫面に汚れの見える以前の作品を利用した、といつた次第なのである。彼等は決して人の顏をまともには見つめない。見ても妙にどんよりした、曖昧な目つきをするのだ。隼にも似た觀察者のまなざしや、鷹のやうな騎兵將校めく視線で相手の心を貫く、などといつたことをしない。それは何故かと云ふと、彼等は相手の顏つきと、自分の部屋に置いてあるヘラクレスの石膏像か何かを、同時に見てゐるからであり、又さもなくば、これから描かうと思つてゐる自分の作品が心に浮ぶからである。そのために、彼等はよく辻褄の合はぬ、時としてはまるでちぐはぐな返事をする。こんな風に頭の中でいろんなものがごつちやになるので、彼等はますます臆病になるのである。

ここに物語らうとしてゐる青年畫家ピスカリョーフも、かういつた種類の人物に屬する。內氣で、臆病なたちではあるけれども、心の底には感情の火花を藏してゐて、折にふれては一團の炎と化しかねない男であつた。彼はひそかに胸を躍らしながら、ああも烈しいショックを與へた女のあとを追つて急ぎながら、我とわが大膽不敵さに呆れてゐるやうな風であつた。彼の視線と思想と感情をひたと吸ひ寄せた見知らぬ女性は、ふいに頭を振り向けて、彼の方をちらと眺めた。ああ、なんといふ神々しい顏ばせ！　目眩ゆいばかり色の白い、美のきはみとも云ふべき額は、黑耀石のやうに見事な髮に緣どられてゐる。その得も云はれぬ髮の毛は幾つかの束をなして渦まき、一部分は帽子の下からはみ出して、夕寒にほんのりと爽々しく紅をさした頰にかかつてゐる。その脣はかずかずの艶なる空想を祕めてきつと閉ぢられてゐる。幼き頃の思出の名殘り、かすかに光る燈明の下に浮ぶ空想や靜かな感激、――さういつたものが悉く一つに溶け合つて、調和にみちた彼女の脣に反映してゐるかと思はれた。

彼女はちらとピスカリョーフを眺めた。と、そのまなざしを受けて、彼の胸は怪しく躍つた。そのまなざしは嚴めしかつた。こんな厚かましい仕方で人の跡をつける男を見て、彼女の顏には憤りの色が浮んだのである。しかしこの艶やかな顏に浮ぶと、憤怒そのものさへ魅惑となるのであつた。羞恥と臆病の發作に襲はれて、彼は眼を伏せながら足を停めた。と云へ、どうしてこの

女神を見失ふことが出來よう。この神體の假の宿りとなつた聖なる場所を、どうして知らずに濟まされよう？　さういつた想念が若き空想家の心に浮んだので、彼はあくまで追跡をつづけることに肚をきめた。けれども、それを相手に氣どられないために、彼は前より更に遠く離れて、何氣なくあたりを見廻して、看板などを眺めてゐたが、その間にも見知らぬ女の足どりを一歩も見のがさぬやうにした。

往來の人影は次第に稀になり、通りは漸く靜かになつた。美女はつと振り返つたが、その脣に輕い微笑が浮んだやうに思はれた。彼は全身をぶるつと慄はして、我とわが眼を信ずることが出來なかつた。いや、あれは街燈がまよはしの光を投げて、あの顏に微笑みに似たものを描き出したのだ。いや、あれは俺の空想が俺自身をからかつてゐるのだ。けれども胸は息苦しくなり、全身が取りとめもない戰慄と化してしまつた。ありとあらゆる感情が燃え上つて、目の前のものが何もかも霧のやうなものに包まれてしまつた。足の下の歩道は走り流れ、疾驅する馬車が動かないやうに見え、橋は迫持の上で伸びたり歪んだりした。家は逆立ちし、交番は向うから倒れかかり、巡査の持つてゐる鉾は看板の金文字や鋏の繪と一緒に、陸の上で光つてゐるやうに思はれた。しかもそれはみな美女の一瞥や、その艶な頭の一轉のなすわざなのである。何一つ見も聞きもせず、何が何やら無我夢中で、美女の運ぶ輕々とした足どりを追つて走りながら、彼は心臓の

動悸にタクトを合せて飛び出したがる自分の足の速度を調節しようと苦心した。どうかすると、果して美女の顏は自分に對する好意を示してゐるのか、といふ疑ひが彼の心を占めた。するとその時、彼はいつとき足を停めた。しかし、心臓の鼓動と、打ち克ち難い力と、ありとあらゆる感情の不安が、彼を前方へおしやつた。彼は、突如、目の前に四階建の家が聳えたのにさへ氣がつかなかつた。四段になつて灯の輝く窓々は、一齊に彼を眺めた。車寄せの手摺りは、彼に鐵のシヨックを與へた。見知らぬ女が階段を駈けのぼつて、一寸ふりかへり、脣に指を當て、ついて來いといふ合圖をしたのに、彼はふと心づいた。膝はふるへ、感情も思ひも燃え立つた。歡喜の稻妻が、たへ難いほど尖つて、彼の心臓にぐさとばかり突き刺さつた。いや、これはまさしく空想ではない！　ああ、ただの一瞬に何といふ幸福ぞや！　たつた二分間にかうした奇蹟のやうな幸福が訪れようとは！

けれども、これはみんな夢ではあるまいか？天女の如き一瞥のために一生を捧げても惜しくないと思つた婦人、その住ひに近づくことさへ難き幸福とさへ思つた女性、――その女性が果して今や自分に對してかほどまで好意を持ち、注意を拂つてくれてゐるのだらうか？　彼は階段に飛びあがつた。彼は何ら地上の野心など感じなかつたし、地上的な慾情の焰に燃えてもゐなかつた、――それどころか、彼はこの瞬間、漠とした精神的愛情の要求で呼吸してゐる童貞の青年

のごとく、純潔であり無垢であつた。淫蕩な男ならば不敵な野心を起さす筈のものが、かへつて彼を更に聖化したのである。弱く美しくものが彼に示したこの信頼、この信頼が彼に嚴肅な騎士道の誓ひ、奴隷のごとく彼女のあらゆる命令を履行せんとの誓ひを立てさせたのである。どうかその命令が出來るかぎり困難であれかし、實行しがたきものであれかし、さらば我は最大の緊張をもつてその困難を克服せんものをと、彼はただその願望に燃えるのであつた。何かしら神祕な
と同時に重大な出來事が、この未知の女をして自分を信頼せしめたのであり、また自分からも重要な奉仕が要求されるであらうと、彼は信じて疑はなかつた。で、彼は早くも己れの裡に、一切に對する覺悟と、それを果し得る力を感じたのである。

階段はうねくねしてゐたが、それと共に彼の空想も目まぐるしく旋轉した。

「氣をつけていらつしやいな！」

といふ聲が竪琴のやうに響いて、彼の血管といふ血管を新たな戰慄でみたした。四階建の薄暗いてつぺんで、未知の女は戸をノックした。戸が開いて、二人は一緒に入つた。かなり見られる顏をした女が、蠟燭を手にして二人を迎へたが、あまりにも奇怪な圖々しい眼つきでピスカリョフを眺めたので、彼はおもはず視線を伏せたほどである。二人は部屋の中へ入つた。それぞれの片隅にゐる三人の女の姿が目に映つた。一人はカルタを並べてゐるし、もう一人はピアノの前に

腰かけて、二本指で古風なボロネーズらしきものを、いともみじめな音で彈いてゐた。三人めのは鏡台の前に坐つて、長い髪を櫛で梳かしながら、知らぬ男が入つて來ても中々やめさうにもなかつた。何かしら不快なだらしなさが、あらゆるものを支配してゐた。それは暢氣な獨身者の部屋でしか見られないやうなものであつた。かなり上等な家具類は埃だらけになつてゐるし、蜘蛛は石膏細工の蛇腹に巣を一面に張つてゐる。隣室の閉めさしになつた扉の隙間から、拍車のついた長靴が光り、軍服の赤い緣縫が見え、男の太い聲と女の笑ひ聲が、遠慮會釋もなく高らかに響いてゐた。

いやはや、なんといふところへ入り込んだものか！　はじめ彼は信じたくない氣持ちで、部屋に充ちてゐるものに眸を凝らして見入り始めた。が、裸の壁やカーテンのない窓は、家のことに氣を配る主婦のないことを示してゐた。これら三人のみじめな女どもの草臥れきつた顏（その中の一人はほとんど彼の鼻つ先に坐つてゐて、まるで人の着物についた汚點か何ぞのやうに、平然として彼をまじまじ見まはすのであつた）、――かうした一切の樣子から、彼はいよいよ確信してしまつた、自分が入り込んだのはほかでもない、上つつらばかりの教養と首都の人口過剩の結果である。みじめな淫蕩が、おのれの住みかとして創立した、かの忌はしい巣窟なのである。それは生活の飾りであるすべての純潔なるもの聖なるものを冒瀆し、踏みにじり、嘲笑してしまつた

巣窟である。そこでは全世界の美であり、創造の冠である女性が、何かしら奇怪で曖昧な存在と化してしまつた。女性はそこで純潔な魂と一緒にすべての女らしさを失つて、忌はしくも男の所作や圖々しさをわがものとして、もはやわれわれ男性と異なるかの弱くして美しきものではなくなつてゐるのである。

ピスカリョフは呆れた眼つきで、かの美女を頭のてつぺんから足の爪先まで調べてみた。それはさながら、果してこれがネーフスキイ通で自分を魅了して、ここまで引つぱつて來た婦人であるかを、確かめようとでもするかの如くであつた。けれども、彼女は依然として艶やかに彼の前に立つてゐた。髪の毛は依然として美しく、双のまなこは依然としてこの世のものとも思へなかつた。彼女はまだまだ水々しかつた。彼女はやつと十七にしかならなかつた。察するところ、彼女が恐ろしい淫蕩の世界にとらはれたのは、ついこの間のことらしく、その淫蕩も彼女の頰にふれることを憚つてゐると思しく、すがすがしい双頰はほんのりと微かに紅味を帶びてゐる。彼女はまさしく艶やかであつた。

彼は身じろぎもせず女の前に立つたまま、早くも先ほどと同じやうに、無邪氣に前後を忘れさうになつた。けれども美女は、相手がかう何時までも默つてゐるのに倦きあきして、まともに彼の眼を見つめながら、意味ありげに微笑んだ。しかし、この微笑はなにかみじめな厚かましさを

多分にもつてゐた。それは如何にも奇妙な笑ひで、信心ぶかい表情が收賄官吏の顏に不似合なごとく、會計簿が詩人に應はぬやうに、彼女の神々しい顏にそぐはなかつた。彼はおもはず身慄ひした。女は可愛い口を開いて、なにやらしやべり出した。が、それはじつに馬鹿げてゐて、俗惡だつた……さながら純潔につれて知性までが人間を見棄てるかのやうに！　彼はもう聞いてゐられなかつた。彼は度はづれに滑稽で、子供のやうに單純だつた。これほどの好意を利用する代りに、——もしほかの男だつたら間違ひなく悅んだでもあらうこの好機に有頂天になる代りに、彼は野性の羚羊のやうに一目散に飛び出して、通りへ遁れ出た。

首を垂れ、兩手をだらりと下げたまま、彼は自分の部屋に坐つてゐた、高價な眞珠を拾ひながら、たちまち海の中へ落した貧乏人のやうに。

「あれほどの美人が、あれほどの神々しい顏立ちをしてゐながら！　しかも何處にゐることだらう？　なんといふ場所に？……」

これが彼の口から發し得るすべてであつた。

まさしく、淫蕩の腐敗の息を吹きかけられた美女を見た時ほど、烈しい哀愁に襲はれることはない。まだしも醜貌が淫蕩と交はる方がまだしもだが、しかし美貌が、優にやさしい美貌が……美貌はわれらの空想裡でただ童貞と純潔とのみ融合するのだ。ピスカリョフを魅了した美人は、

眞に奇蹟的と云つていいほど並々ならぬ現象であつた。彼女があの忌はしい環境の中にゐるといふことが、さらに異常なことに思はれた。彼女の輪廓のすべてが清らかで、あでやかな顏の表情ぜんたいが何とも云へぬ氣品を帶びてゐるので、淫蕩が早くもその上に恐ろしい爪を伸ばしてゐようとは、何としても考へられなかつた。彼女は情熱的な夫にとつては價の知れぬ程の眞珠となり、全世界となり、一切の天國・樂園となつたに相違ない。彼女はあまり目立たぬ家庭にゐたら、美しく靜かな星となつて、見事な唇を動かしただけで、甘美な命令を下したはずである。彼女は篏木床(パルケート)が光り輝き、無數の蠟燭に照らされた、人のびつしりつまつてゐる大廣間で、言葉もなく敬虔の念に打たれて彼女の足もとに跪いてゐる多くの崇拜者の中にあつて、一箇の女神とさへなつたに相違ない。けれども、悲しいかな！　人生の調和を破壞しようと狙つてゐる恐ろしい地獄の意志によつて、無慚な哄笑とともにあの奈落の底に投げこまれたのである。

腸を裂くばかりの憐愍の念に囚はれて、彼は燃え盡きんとしてゐる蠟燭の前に坐りつづけてゐた。もはや夜半も疾くに過ぎて、塔の上の鐘は十二時半を告げたが、彼は眠りもせず、仕事もせずに、じつと坐つてゐた。睡は彼が不動を保つてゐるのにつけ込んで、もうそつと彼を摑まうとして、部屋も姿を消さんとし、ただ蠟燭の灯ばかりが夢うつつの間を透かして光つてゐた。と、扉をノックする音に彼はぶるつと身慄して、目をさました。扉があいて、豪奢な四季施を着た從

僕が入つて來た。彼の獨り暮しの部屋を、今まで曾て御大家の從僕など訪れたことがなかつた、しかもこんな時ならぬ刻限に……彼は合點が行かず、烈しい好奇心をいだきながら、眼を皿のやうにして入り來る從僕を見つめた。

「あの、」と從僕は恭々しく會釋しながら云つた。「あなた樣が二三時間まへにお訪ねになつたたくの奥樣が、あなた樣をお迎へ申して來いとお吩ひつけで、馬車をお寄越しになりました。」

ピスカリョフは呆れて言葉もなく立つてゐた。

『馬車、お四季施を着た從僕……、いや、これはきつと何かの間違ひだらう……』

「ねえ、君、」と彼はおづおづと云ひ出した。「君はたぶん門違へしたんだらう。奥樣はきつと誰かほかの人のとこへ君を寄越されたので、僕のとこぢやないだらう。」

「いいえ、わたくしは門違へなどいたしません。だつてあなた樣は、リテイナヤ街にある建物の四階まで歩いて奥樣をお送りになりましたでせう？」

「ああ。」

「いや、それでしたら、どうぞお早くおいで下さいまし。奥樣は是非ともあなた樣にお目にかかりたいと仰しやつて、お邸まで眞直にいらして頂くやうにとのお申しつけなので。」

ピスカリョフは階段を駈けおりた。中庭には成程、馬車が待つてゐた。彼は乘つた、と扉がぱ

たんと閉まつて、車道の石が轍と馬の蹄の下に轟々戛々と鳴り出した。――軒燈に看板を照らし出されてゐる家々の明るい連なりが、馬車の窓を掠めて通ぎた。ピスカリョフは道々ずつと考へつづけたが、このアヴンチュールを何と解いていいかわからなかつた。自分の邸、馬車、豪奢な四季施を着た從僕……さういつたやうなものを、四階の部屋や、埃だらけの窓や、調子のくるつたピアノと結びつけて考へることが出來なかつた。

馬車は晃々と照らされた車寄せのまへに停まつた。その途端、夥しい馬車、馭者たちの話聲、あかあかと輝く窓、音樂のひびきが、彼の度膽をぬいた。豪奢な四季施を着た從僕が彼を馬車から扶けおろして、大理石の圓柱の並んでゐる玄關へ案内した。そこには金ぴかの玄關番が立つてをり、明るいランプの下にはマントや毛皮外套がいつぱい投げ出されてゐた。えならぬ香りがしみ込んでつやつやしく光る手摺つきの、空氣のごとく輕々と見える階段は、高く上の方へ伸びてゐた。彼は早くもその上へ昇つて行き、最初の大廣間へ入つて行つたが、一歩ふみこむと同時に、おそろしい群衆に一驚を吃して、おもはず後ずさりした。その顏ぶれが餘りにも色とりどりなので、彼はすつかり間誤ついてしまつた。何かの惡魔が全世界を粉微塵に碎いて、そのかけらを意味もわけもなく一緒くたに交ぜてしまつたかのやうであつた。かがやくばかり白い貴婦人たちの肩、黑い燕尾服、シャンデリヤ、ランプ、煙のやうに靡る羅（うすもの）、空氣とまがふリボン、立派な

コーラス隊の蔭から覗いてゐる太いコントラバス、――なにもかもが彼の目には素ばらしいものに映じた。燕尾服に勳章をつけた品のよい老人や半老人、かるがると、しかも誇らしく、同時に優美な態度で欽木床（パルケット）を歩んだり、あるひは並んで腰かけたりしてゐる貴婦人たち、かういふものが一時に彼の目に入り、フランス語や英語が洪水のやうに彼の耳に流れ込んだ。その上、黑い燕尾を着こんだ青年たちは何とも云へぬ氣品にみち、話すにも沈默するにも立派に己れの品位を保ち、よけいなことは一口も云はず、冗談をいつても威嚴を失はず、いともうやうやしく微笑し、いかにも見事な頰髯を生やし、ネクタイを直すとき巧みに美しい手を見せる。また貴婦人たちはまるで空氣のやうにかるがるとして、心からの自己滿足と陶醉氣分に浸り、眼を伏せてゐる樣子が如何にも魅惑にみちてゐるので……いや、なにかにと云はうより、おづおづと圓柱に凭れかかつたピスカリョフのつつましやかな姿を見ただけで、彼がすつかりどぎまぎしてゐることは分かりきつてゐた。

そのとき一團の群衆が舞踏の連中をとり圍んだ。踊つてゐる婦人たちはパリ出來の透き通るやうな布をまとひ、まさしく空氣で織つた衣裳を身につけて踊り廻つてゐた。そしてまぶしいばかりの足で無造作に欽木床（パルケット）に觸れてゐたが、それはまるで觸れないよりも、ひとしほ宙に浮いてゐるやうな感じであつた。けれどもその中にあつて、ある一人の貴婦人が誰よりも美しく、誰より

も豪華な素ばらしい衣裳をまとつてゐた。その裝身具の取り合せには筆にも口にも盡されぬ、いともデリカな趣味があふれてゐた。しかも彼女はさういふことには一向こころを使はないのに、その趣味が自然と思はず知らず流れ出した、といつたやうに思はれた。彼女は周りを取り卷く見物の人々を、見るでもなければ見ないでもなかつた。見ごとな長い睫毛は無關心に伏せられてゐた。そして頭を傾ける度に輕い影が魅力にみちた額に射す時、輝くばかり白い顏は一入まぶしさを增すのであつた。

ピスカリョフは群集をおし分けて、彼女をよく見さだめようと、懸命の努力をした。けれども、殘念千萬なことには、黑いぽい捲き毛をした誰かの大きな頭が、のべつ邪魔をするのであつた。おまけに、群衆がぎゆうぎゆうと押しつけるので、ひよつと何かの拍子に三等官あたりのお豪方を突き飛ばしはしないかと云ふ心配から、前へ出ることも後へひくことも出來なかつた。しかし、やがてやうやく前の方へもぐり出て、見苦しくないやうに身なりを整へようとして、ひよいと自分の服を眺めた。と、ああ、なんといふことか！　彼はいちめん繪具の汚臭だらけのフロックを着てゐるではないか。出かける時に急いだので、ちやんとした服裝に換へることさへ忘れたのである。彼は耳のつけ根まで眞赤になり、頭を垂れて、穴があれば入りたいやうに思つた。けれども、入らうにも穴はどこにもなかつた。りつぱな身なりをした若い侍從武官たちが、壁の

やうに一分の隙もなく彼のうしろにひしひしと詰め寄せてゐるのであつた。で、彼はこの美しい額と睫毛をした麗人から、出來るだけ遠く離れようとさへ考へはじめた。もしや相手が自分を見てゐはしないかと、彼は恐怖の念をいだきながら眼を上げた。すると、ああどうしよう！　彼女はすぐ目の前に立つてゐるではないか……けれども、これはどうしたことか？　ほんとに何としたことか？

「これはあのひとだ！」と彼はほとんど咽喉いつぱいの聲で叫んだ。

まさしくそれはあの女であつた、――例のネーフスキイ通で出會つて、その住家まで跡をつけて行つたあの女であつた。

とかくするうちに、彼女は睫毛をあげて、あのかがやかしい眸で一同を眺めた。

「ああ、ああ、ああ、なんて美人だ……」と彼は息をつまらせながら、やつとのことでこれだけ云つた。

何とかして麗人のお目にとまらんものと競ひ合つてゐる男の群れを、彼女はぐるりと見まはしたが、やがて間もなく妙に疲れたやうな氣のない表情で顏をそむけた途端に、ピスカリョフと視線がぴつたり會つた。ああ、何といふ天國！　なんといふ樂園！　おお、神よ、この歡喜に耐ふる力を授けたまへ！　生命はかかる歡喜を容れることが出來ぬ、かかる歡喜は生命を破壞し、魂

を奪ひ去つてしまふだらう！

彼女は合圖をした。が、それは手を動かしたのでもなければ、首を傾けたのでもない。否、その人を惱殺するやうな眼の中に現はれた微妙な、あるかなきかの表情が合圖となつたのである。誰もほかのものは氣づかないけれども、彼はそれを見、それを曉つたのである。

舞踏は長いことつづいた。疲れた音樂は絶えだえになつて、すつかり消えてしまふかと思はれるばかりだつたが、また盛りかへして來て、齒の浮くやうな音を立てたり、烈しい轟音を爆發させたりした。つひに舞踏は終つた。彼女は腰をおろした。疲れた胸は煙のやうな羅（うすもの）の下で、持ちあがつたり下がつたりしてゐた。手は（ああ、なんといふ素ばらしい手だらう！）膝の上に落ちて、透き通つた着物をおしつけた。すると着物はその手の下で音樂を奏するが如くに輕く息づきはじめ、えも云はれぬ薄紫色が彼女の美しい手の輝くばかりな白さを、ひとしほくつきりと浮き出させた。もしもあの手に觸れることが出來たら、――それこそもうほかに望みはない！　それよりほかに何かを望むなどと云ふことは、あまりにも厚かまし過ぎる……一こともロをきく勇氣すらなく、呼吸をすることさへ憚りながら、彼は女の椅子の後ろに立つてゐた。

「あなたお退屈だつたでせう？」と彼女は口をきつた。「わたしも退屈でしたわ。でも、わたし氣がついたんですけれど、あなたわたしを憎んでらつしやいますね……」例の長い睫毛を伏せな

がら、かう附け加へた。

「あなたを憎むんですつて？　私……私が？……」とピスカリョフはすつかり間誤ついてさう云ひかけた。恐らくは辻褄の合はぬことを山ほど並べ立てたに相違ないのだが、そのとき頭髪（あたま）を見事にカールさせた侍僕頭が近づいて、如才ないけれども針を含んだ言葉で注意した。綺麗な齒並を見せながら、かなり氣持のいい笑みを浮べてはゐたものの、その皮肉は一つ一つ尖つた釘のやうにピスカリョフの胸を刺した。到頭、いい按配に誰かしらそばにゐた人が侍僕頭に向つて何やら問ひかけた。

「ああ、これぢやたまらないわ！」と彼女はこの世のものとも思はれぬ瞳を彼の方へむけて、かう云つた。「わたし廣間（ホール）の向う側へ參りますわ、あなたもいらつしやいな！」

彼女は群集のあひだを分けて辷るやうに行つたと思ふと、忽ち姿を消してしまつた。彼は氣狂ひのやうに人々を押し分けて、早くも部屋の向う側へ駈けつけた。

ああ、やつぱりゐた！　誰よりも美しくあでやかに、女王のごとく鷹揚に腰かけたまま、目で彼を探してゐるのであつた。

「あなたいらしつたのね？」と彼女は小聲に云ひ出した。「わたしあなたに何もかも打ち明けて申しますわ。あなたはきつと、わたし達がお近づきになつた前後の事情を不思議におもつていら

つしやるでせうね。あなたはあすこで卑しい女どもを御覽になりましたが、わたしもあの仲間の一人だとは、まさかお思ひにはならないでせうね え？　わたしの振舞ひはあなたの目に奇妙に見えるでせうけれども、わたしその祕密をお打ち明けしますが、いかがでせう、」と彼女は相手にじつと視線をそそぎながら云つた。「けつしてその祕密をお洩らしにはなりません？」

「おお、決して！　決して！　決して！……」

しかしその時、かなり年配の男がそばへ寄つて來て、何かしらピスカリョフには譯のわからない言葉で彼女に話しかけた。彼女は祈るやうな眼つきでピスカリョフを眺め、じつとその席に坐つたまま、自分の歸つて來るのを待つてゐるやうにと合圖をした。けれどもピスカリョフは、ゐても立つてもゐられないほど自烈たくて、たとへ彼女の口から出たものでも、いつさい他人の命令など聽く氣にはなれなかつた。彼は女のあとを追つて行つたが、群集がたちまち二人を押し隔ててしまつた。もう薄紫の着物は見えなくなつた。不安の念に驅られながら、彼は部屋から部屋へと、遠慮會釋もなく出會ふ人を一々突き飛ばして行つたが、どの部屋にも名士たちが死のやうな沈默につつまれて、歌留多を鬪はしてゐるのみであつた。ある部屋の片隅では三四人のものが、軍務の方が文官勤務よりも優れてゐるといふ說について、議論を上下してゐるかと思へば、また別のところでは立派な燕尾服を着た若い人達が、多作をもつて鳴る詩人の尨大な著作集につ

いて、輕い感想を洩らし合つてゐる。ふと氣がつくと、一人相當な年配らしい上品な紳士がピスカリョフの燕尾服の釦を摑んで、ある問題に關する自分の當を得た主張を何と思ふかと、彼の意見を敲くのであつた。しかし彼は、相手の頸にかなり高い位階を示す勳章が下つてゐるのさへ見ようとしないで、無作法千萬にも手荒く押しのけて、次の間へ駈け込んだが、――そこにも女はゐなかつた。その次の部屋にもやはりゐない。

「あのひとは何處にゐるのです？　あのひとに會はせて下さい！　ああ、あのひとを一目みないでは、僕は生きて行くことが出來ません！　あのひとが何を云はうとしたか、それが僕は聞きたいのです！」

けれど、彼の努力はすべて徒勞であつた。不安と疲勞にうちひしがれて、彼は片隅に身をちぢめながら、群集を眺めてゐた。とは云へ、彼の血走つた眼には何もかもが、ぼうつとした怪しげな形をとつて映るのであつた。とどのつまり、自分の住んでゐる部屋の壁がはつきりと見えて來た。彼は目を上げた。すぐ前には燭台が立つてゐて、覺束ない火が底の方に消えなんとして微かにともつてゐる。蠟はすつかり溶けてしまつて、古ぼけた卓子の上に流れてゐる……

では、何時のまにやら睡つてゐたのか！　ああ、なんといふ美しい夢だつたらう！　何のために目なんかさましたのか？　どうしてせめていま一分間でも待つてくれなかつたのだらう？　あ

のひとは確かにもう一度姿を現はしたに相違ないのに！　忌はしい曉の光がどんよりと窓から射し込んでゐる。部屋は灰色にくすんで、何とも云へない取り亂した體たらく……ああ、現實はなんといふ厭らしいものだらう！　空想の世界に比べたら、現實などに何か價値があらうぞ？　彼は手早く服を脱ぎ棄てて、ベットの上に横になり、飛び去つた夢をむりに呼び戻さうと、毛布をすつぽり被つた。なるほど、夢は猶豫なく訪れはしたけれども、彼が見たいと思つたのとはまるつきり違つた夢だつた。パイプをくはへたピロゴフ中尉が出て來るかと思へば、美術學校の門番が現れたり、勅任官の姿が見えるかと思へば、いつか肖像を描いてやつたフインランド女の首が出て來たり、すべてそんな風のやくざな夢ばかり。

彼はまた一と寢入りしようと思つて、お正午（ひる）まで寢床の中に入つてゐたが、彼女はつひに姿を現はさなかつた。せめてたつた一瞬間でもあの美しい面影を見せてくれたら、せめて一（いつ）ときでもあの輕やかな衣摺れが聞えたら、高巓の雪のやうに輝くあの露はな腕が、せめてちらりとでも目の前を掠めてくれたら！

あの夢のことばかりで頭が一杯になつた彼は、何もかも一切ふり棄ててしまひ、何もかも一切わすれ果てて、やるせない悲痛な面もちで坐つてゐた。彼は何一つ手を觸れようとしなかつた。生氣のない眼はまるつきり何の興味もなく、内庭に面した窓を眺めてゐた。外では汚らしい水運

び人足が水をあけてゐたが、こぼれた水はたちまち凍るのであつた。それから觸れ賣の「ええ古着に御用」といふ山羊のやうな聲。かうした日常茶飯的な現實のことごとが、奇怪に彼の耳朶を打つ。かうして彼は晩までじつと坐り通してゐたが、暗くなるや否や待ち兼ねたやうに寢床へ飛び込んだ。長いあひだ不眠と戰つたのち、漸く睡りに落ちた。と、又しても妙な得體のしれない夢、何かしら俗つぽい穢らはしい夢。

『ああ、神様、せめて一瞬間、ほんの一瞬間だけでも、あのひとの顏を見せてください！』

彼はふたたび日暮れを待ち兼ね、ふたたび睡りに落ちたが、夢に現はれるのは又しても何處かの役人で、それが役人でもあればファゴットでもあるのだ。ああ、これではやり切れない。漸くの思ひで彼女の姿が現はれた！　頭と捲毛……こちらを見てゐる……ああ、しかし何といふ呆氣なさ！　又もや霧が立ち罩めて、又もや何かしら馬鹿げた夢に代つてしまふ。

かくして遂に夢が彼の生命になつてしまつた。それからと云ふものは、彼の生活ぜんたいが妙な形を取つて來た。云はば、彼はうつつに睡つて、夢中に醒めてゐたのである。空しいテーブルの前に言葉もなく坐つてゐる彼、通をふらふら歩いてゐる彼、さういふ彼の姿を誰かが一見したならば、紛れもない夢遊病者かアルコール中毒患者だと思つたに相違ない。その視線には全くなんの意味もなくなり、性來の放心癖は極度に募つて、いよいよ猛威を揮ふやうになり、彼の顏面

から一切の感情、一切の運動を追ひのけてしまつたのである。彼が活氣づくのはただ夜の訪れる時ばかりだつた。

かうした狀態は彼の體力を弱めた、しかも彼にとつて最も恐ろしい苦しみは、ほかでもない、遂に睡りが彼を見棄てはじめたことである。彼は、睡りを回復する方法があると聞いてゐた、――そのためにはただ阿片を飲みさへすればよいのである。しかし、その阿片をいつたい何處で手に入れたものだらう？　彼はあるペルシャ人のことを想ひ出した。これはショールの店を持つてゐて、いつも出會ふ度ごとに、美人を描いてくれとねだるのであつた。彼はこの男のところへ行つて見ようと決心した。この男のとこにはきつと阿片があるに相違ないと思つて。

ペルシャ人は長椅子の上にあぐらをかいたまま彼を迎へた。

「お前さん何のために阿片なんか要るんだね？」と彼は訊ねた。

ピスカリョフは不眠症に惱まされてゐることを話した。

「よろしい、お前さんに阿片を上げませう、しかし、その代り別嬪の畫を描いておくれよ。いい別嬪でなけりや駄目だよ。眉が黑くて、眼はオリーブの實のやうに大きくなけりや不可ないよ。そして、俺がその女の傍にすわつて、パイプを吸つてるところを描いてな！　いいかい、いい女でなけりや駄目だよ！　別嬪でなけりや！」

ピスカリョフはすつかりその通りにしてやると約束した。ペルシャ人はちよつと部屋を出て行つたと思ふと、黑い液體のいつぱい入つた小さな壜を持つて來て、さも大切さうにその一部を別の小壜に分け、これは一回に七雫だけ水に垂らして飲むので、それ以上は駄目だと教へて、ピスカリョフにわたした。ピスカリョフはこの貴重な壜を貪るやうに引つ摑んで、一目散にわが家へ走つて歸つた。どんなに黃金の山を積まれたところで、この壜をわたすことではない。

家へ着くと、彼は幾たらしかをコップの水に入れ、ぐつと飲み干すと、ごろりと引つくりかへつた。

・ああ、何といふ嬉しいことだらう！　あのひとだ！　あのひとが再びあらはれた、が、今度はもうまるで別の世界にゐるのだ！　田舍風の明るい小家の窓ぎはに、なんと美しく坐つてゐることか！　その身なりは、ただ詩人の思想の衣のみが纏ひ得るやうな單純さに息づいてゐる。その髮の結ひぶり……おお、その髮の結ひぶりが何と無造作で、しかもよく似合ふことか！　小さな襟卷きがすらりとした頸筋にかるく掛けられてゐる。何もかもが質素でありながら、しかもその趣味のよいことは神祕と云つていいほど言葉につくし難い。その優美な歩きぶりの可愛らしいこと！　その足音や質素な着物の衣ずれの音樂的なこと！　馬の毛で編んだ腕環に締められた手首の美しいこと！　彼女は眼に涙を浮べながら云ふのであつた。

「どうかわたしをさげしまないで下さい、わたしは決してあなたの思つていらつしやるやうな女ではございません。どうかわたしを見て下さい。じつとよく御覽になつた上で、わたしがあなたの思つていらつしやるやうなことが出來る女かどうか、仰しやつて下さいまし。」

「とんでもない、ちがひます、ちがひます！　そんな失禮なことを考へたものは……そんなやつは……」

しかし、そこで目がさめてしまつた、感動し、くたくたになり、眼に涙を浮かべながら。

『いつそお前はまるでゐなければいいのに！　いつそこの世に住んでゐないで、感激にみちた藝術家のつくり出したものだつたらよかつたのに！　さうしたら俺はカンヴスのそばを離れないで、お前を何よりも美しい空想として、お前ばかりで生き、呼吸してゐたものを、――その時は俺も仕合せになつてゐたものを。さうしたら、それ以上の望みなんか一切すててしまつたに相違ない。俺は寢る前、醒める前に、お前を守護の天使のやうに呼び招くだらう。そして、何か神々しい神聖なものを描く必要が起つたら、お前の出現を待つだらう。しかし、今……はなんといふ恐ろしい生活だ！　あの女が生きてゐたつて、何の役に立つといふのだ？　いつたい氣狂の生きてるといふことが、以前かれを愛した親類や友達にとつて愉快なものだらうか？　ああ、我々の生活はなんと云ふことだらう！　永久に空想と現實との矛盾がつづくのだ！』

かうした想念がほとんど常に彼の頭を占めてゐた。彼はなんにも考へなかつた、それどころか、ほとんど何一つものも食べなかつた。そして戀する人のひた向きさで、じりじりしながら夜が來るのを待ちかね、懷かしい幻にあこがれるのであつた。絶え間なく一つのものに思ひを凝らしてゐたために、それは遂に彼の生活ぜんたいと一切の空想の上に嚴として君臨するやうになり、懷かしい面影はほとんど毎日のやうに彼を訪れるやうになつた。しかも、必ず現實とは正反對の狀態に置かれてゐるのだ。それは彼の思ひが幼な子のやうに純眞そのものだつたからである。かうしていつも夢の中にばかり現はれるために、當の女までが何かしら段々と純潔さを增し、完全に變容を遂げて行くやうにおもはれた。

阿片を用ひるために彼の想念はいやが上にも赤熱した。もし狂氣の絶頂に達するまで、烈しく向う見ずに、恐ろしい破壞的な反逆めいた戀に溺れてゐる男があるとしたら、その不幸者はほかでもない彼なのである。

いろいろな夢の中で、彼にとつて何よりも嬉しいのが一つあつた。それは自分の畫室の光景である。彼は心から浮きうきとして、パレットを手にさも樂しげに腰かけてゐる！　彼女もやはりそこにゐるのだ。もう彼の妻になつてゐる。すぐそばに腰をおろして、華奢な肘を良人の椅子の背に凭せながら、良人の描く畫を眺めてゐるのだ。そのもの憂げな疲れたやうな眼には、擔ひき

れぬほどの幸福感が浮んでゐる。部屋の中は何から何まで天國の氣分に充ち溢れ、じつに明るく、じつに氣持よく飾られてゐる。ああ！　彼女は艶やかな首を良人の胸に凭せかけるではないか……これ以上に愉しい夢は彼も見たことがない。かういふ夢を見たあとは、その前よりも心持がすがすがしく、ぼやけたやうなところもなくなるのであつた。彼の腦裡は奇怪な想念が湧いて來た。

『もしかしたら、あれは何かしら恐ろしい偶然のために、心にもなく淫蕩の世界に引き込まれたのかも知れない。ひよつとしたら、あれの心は悔悟の方へ傾いてゐるのかも知れないぞ。あれは自分でも恐ろしい境界から脱け出さうと藻掻いてるのかも知れやしない。それだのに、あの女が身を滅ぼしてしまふのを、平氣な顏をして打つちやつておいていいものだらうか？　しかも、あの女が泥沼に沈んでしまふのを助けようと思へば、ただちよつと手を差し伸しさへすればいいのぢやないか！』彼のもの思ひは更に次から次へと繰りひろげられた。『俺は誰にも知られない人間で、』と彼は獨りごつのであつた。『誰も俺なんか構ひはしないし、また俺の方だつてだあれにも用はないんだ。もしあの女が心底から悔悟の情をしめして、自分の生活をあらためるなら、俺はあの女と結婚する。いや、必ず結婚しなくちやならない。さうした方が、家政婦と結婚したり、また世間によくある例で、ひどい畜生同樣の女を女房に持つやうな多くの連中よりは、ずつとまし

しに相違ない。いや、俺は欲得づくを離れてやるのだから、あるひは偉大な功業でさへあるかも知れない。つまりこの世のもつとも美はしい飾りを取り戻してやるんだからなあ！』

かういふ輕はづみな計畫を立てた時、彼は顏がさつと赧くなるのを感じた。鏡の前へ行つて見て、彼は頰がげつそりこけて、顏の色が蒼ざめてゐるのに我ながらぎよつとした。彼は念入りに身ごしらへをはじめた。顏を洗ひ、髪を撫でつけ、新しい燕尾服に洒落札たチョッキを着け、マントをひつかけて外へ出た。ちやうど長い患ひの後に、はじめて思ひ切つて外出を決心した病み上りのやうに、彼はすがすがしい空氣を吸ひ込むと、胸の中がすつとするやうに思はれた。あの宿命的な遭遇の時以來、まだ一度も足を踏み込んだことのない街に近づいた時、おもはず胸の鼓動が早くなつた。

彼は長いこと家をさがした。どうも記憶力がすつかり衰へてしまつたらしい。彼は二度も通を往復したが、どの家の前に足を停めていいのか分らなかつた。やつとのことで、とある一軒の家がそれらしく思はれた。彼は階段を駈けのぼつて、扉をノックした。扉があいて……出て來たのは誰であつたか？　彼の理想、彼の胸に祕めてゐた俤、空想裡に描いたさまざまな畫面の女主人公、彼の生命である女性、恐ろしく、惱ましく、同時にまた甘い思ひの對象である女性、――彼女だ、まさしく彼女が目のまへに立つてゐるのだ。彼はがたがた慄へ出した。歡喜の發作に襲は

れて足が萎え弱り、立つてゐるのもやつとであつた。彼の目の前に現はれた彼女は、依然としてあでやかであつた。尤も、眼は寢ばれたやうになり、顏色も蒼ざめて、前ほどすがすがしく見えなかつたが、それでもやはり美しかつた。

「あら！」と女はピスカリョフを見ると、眼をこすりながら（その時はもう午後の二時だつたが）、叫び聲を立てた。「何故あのとき逃げ出したの？」

彼はぐつたりと力拔けがして椅子に腰をおろし、女を眺めた。

「わたしたつたいま目を醒ましたばかりなのよ、何しろ朝の七時に送られて歸つたんだもの、すつかり醉つぱらつちまつてね。」と女は微笑みながら附け足した。

ああ、こんな口をきく位なら、いつそお前は啞であつて、舌が役に立たなかつたら、その方が幾らよかつたか知れない！　彼女はまるでパノラマのやうに、突如として自分の全生活を擴げて見せたのである。しかし、それにも拘らず、彼は氣力を引き立てながら、自分の勸告が女に効き目をあらはすかどうか、ためしてみようと肚をきめた。一生懸命に勇氣をふるひながら、彼は懷へを帶びた、しかも燃ゆるばかりに熱の籠つた聲で、彼女の境涯が如何に恐ろしいものであるかを、諄々として說きはじめた。女は注意ぶかさうな樣子で耳を傾けてゐたが、そこには何か思ひがけない奇妙なものに出會つた時に見受けられる驚愕の表情があつた。女は輕くにやつと笑つて、

片隅に坐つてゐる友達の方を見やつた。こちらは櫛の掃除をやめて、これも同樣に注意ぶかく新參（しんまゐ）の說敎者の言葉を聽いてゐた。

「なるほど、僕は貧乏です。」長いあひだ敎訓めいた勸告を述べ立てたのち、最後にピスカリョフはかう云つた。「しかし二人で働かうぢやありませんか。お互同志はげみ合つて暮しをよくするやうに骨折らうぢやありませんか。何でも自分の力でやつて行くほど愉快なことはないんだから。僕が畫を描いてゐると、あなたは傍に坐つて、刺繍をするかそれとも何かほかの手仕事をしながら、僕の仕事の勵みになつてくれる、――さうすれば何にも不自由しないで濟みますよ。」

「そんなことが出來るもんですか！」と一種輕蔑の表情を浮べて、女は相手の言葉を遮つた。「わたしは洗濯婆さんやお針つ子とちがひますからね、そんな賃仕事なんかしてたまるもんですか。」

ああ！　この言葉の中には賤しい、淺ましい生活が殘りなく暴露されてゐた、――淫蕩に必ずつきものの空虛と無爲にみちた生活が。

「あたいと結婚して頂戴よ！」と今まで隅つこでじつと默つてゐた仲間の女が、厚かましい顏つきで引き取つた。「あたいが奧さんになつたら、こんな風に坐つてるわ！」さう云ひながら、彼女はそのみじめな顏に何かしら馬鹿げた表情を浮べたが、それがひどく仲間の美女をおもしろがら

せた。

ああ、これはもうあんまりだ！　これではとても我慢がしきれない！　彼は何の感じも考へもなく、夢中で外へ飛び出した。彼は頭がぼつとしてしまつた。腑抜けのやうに、これといふ當てもなく、何一つ見ず、聞かず、感じないで、彼は終日さまよひつづけた。果して彼は何處かへ泊つたのかどうか、誰一人として知るものがなかつた。やうやく翌日になつて、彼は何か本能みたいなものに引きずられて、ふらりと自分の下宿へ歸つて來たが、髪は蓬々に振り亂れ、眞蒼な顏には狂氣のしるしを浮べ、見るも恐ろしい姿であつた。自分の部屋の鍵をぴんとかけて、誰ひとり中へ入れず、何ひとつ取り寄せなかつた。

四日すぎた、けれども閉ざされた扉は一度もあかなかつた。かうして遂に一週間たつたが、部屋は依然として鍵がかかつたままであつた。人々は扉の前へ押しかけて、彼の名を呼びはじめたが、なんの答もなかつた。とどのつまり扉を打ち破つて入つて見ると、喉笛を搔き切つた空しい死骸が横たはつてゐた。血腥い剃刀が床の上に轉がつてゐた。引き吊つたやうに擴げられた兩手や、恐ろしくひん曲つた顏つきで、腕が狂つたために、罪ふかい魂が軀を離れるまでには、長いこと苦しんだらうといふことが想像された。

かうして不幸なピスカリョフは、物狂はしい情熱の犧牲となつて亡びた。靜かで、內氣な、子

供じみるほど單純な、つつましい青年、あるひは年とともに華々しい光芒を放つたかも知れない才能の火花を藏してゐた畫家は死んだ。誰一人として彼のために泣く人もなかつた。平々凡々たる警察官の姿と町醫者の無感動な顏のほかには、彼の空しい亡骸の傍に人影とても見當らなかつた。柩は一切儀式らしいものさへなく、しづかにオフタをさして運び出された。ただ一人、兵隊上りの番人が、あとからついて來ながら泣いてゐたが、それもヲートカを一壜よけいに飲んだからに過ぎない。生前大いに保護者めかしい態度を取つてゐたピロゴフ中尉ですら、遺骸を見に來ようともしなかつた。もつとも、彼はそれどころの騷ぎでなく、大變な事件にかかり合つて急がしかつたのである。ここらでそろそろこの人物に立ち歸ることとしよう。

筆者は遺骸とか死人とかいふものが好きでないから、いつも長い葬式の行列に行く手を遮られると厭な氣がする。そんな時には、右手が把火で塞がつてゐるものだから、左手で嗅煙草をかいでゐる變な帽子を被つた廢兵がついて行くものである。わたしは贅澤な棺台や天鵞絨の柩を見ると、いまいましい氣がしてならない。しかしながら、荷馬車の上に何の蔽ひもしてない貧しい眞赤な棺を載せ、お供と云つてはその邊の辻で出會つた乞食女が一人、他に用事がないままにとぼとぼついて行く、かういふ光景を見ると、私の胸には忌々しい氣持が哀愁の念にまじるのだ。

私達はたしか、ピロゴフ中尉が不幸なピスカリョフと別れて、ブロンドの女の後を追つて駈け

出したところで、この人物を打つちやつてしまつたやうに思ふ。そのブロンドは、輕快な感じのするかなりうま味のある女だつた。商店の飾窓を一つ一つ覗いては、そこに陳列してあるバンドだの、肩掛だの、耳環、手袋、その他の小間物類にじつと見入るかと思へば、のべつあちらこちらと動きまはつたり、四方八方きよろきよろと眺めまはしたり、うしろを振り返つて見たりするのであつた。

「ちよいと、可愛い姉さん！」ピロゴフは誰か知つた人に會つてはと、外套の襟を立てて顔をつつみ、依然として追跡をつづけながら、自信たつぷりの調子で聲をかけた。とは云へ、ピロゴフ中尉とは何ものであるかを、讀者諸君にお傳へしておくのも無駄ではあるまいと思ふ。

が、ピロゴフ中尉が何者であるかを語る前に、彼に屬してゐる社會について一言しておく必要があらう。將校達の中には、ペテルブルグの社會で何か中流階級とでも云つたやうなものを形づくつてゐる連中がある。四十年間の刻苦精勵でやうやく勤め上げた五等官か四等官の夜會なり晩餐會なりに行くと、諸君は必ずかうした連中の一人に出くわすに相違ない。ペテルブルグそのものののやうに蒼褪めて、色も香もない幾たりかの娘たち（その中にはもう蕾の立つたのも交じつてゐる）茶のテーブル、ピアノ、内輪のダンス・パーティ——かういつた風のものに對しては仰々しい肩章が附きもののやうになつてゐて、これがラムプの光のもとで、つつましいブロンドの娘

や、黑い燕尾服の兄さんや、知人たちの間で、ぴかぴかと異彩を放つのである。かういふ落ちつきすました令孃達に活を入れて、朗らかに笑はせるのはなかなか骨が折れる仕事で、それには大變な技倆が必要である、いや、むしろ一切なんの技倆も持ち合せないことが必要である、と云つた方がいいかも知れない。話しぶりは餘り氣が利きすぎてもいけなければ、餘り滑稽すぎてもいけない、萬事につけて女性の好む瑣末な味が必要なのである。その點にかけては、右に述べた御連中の腕を認めてやらなければならない。彼等はかうした色も香もない令孃たちを笑はせ、耳を傾けさせる特殊な天分を有してゐるのだ。半ば笑ひ聲に消される叫び聲、

「ああ、よして頂戴！　そんなに笑はせて、あなたよく恥かしくないことね！」

これが彼等にとつては、しばしば無上の報酬となるのである。

上流の社會で彼等にぶつかることは、きはめてまれといふより、むしろ絶對にないと云つていい程である。この社會ではアリストクラートと呼ばれてゐる人達のために、完全に追ひ出されてしまつた。そのくせ、彼等は學者であり、教養人であるとされてゐるのだ。彼等は好んで文學を談じ、*ブルガーリン、プーシュキン、**グレーチなどを賞讃し、輕侮のこもつた皮肉の調子でA・A・

* プーシキン時代の通俗作家

** 右に同じ、彼の飜譯『イリアッド』は有名である。

オルロフを品評する。彼等は公開講演となると、それが簿記に關するものであらうと、林業に關するものであらうと、一つとしてのがすことではない。芝居では、どんな脚本が上演されてゐようと、必ずこの御連中の一人や二人を見受けないことはない。ただ出しものが『フィラートカ』と云つたやうなものである場合は例外で、これには彼等の趣味性が甚しく侮辱を感ずるのである。劇場では彼等は定連になつてゐる。これは劇場經營者にとつてはこの上もなく有難いお仲間なのである。彼等は脚本の中に出て來る綺麗な詩が大好きだし、また大聲で俳優たちを幕外へ呼び出すことも大の得意である。彼等の多くは官立學校で教鞭を取つたり、その口を見つける運動をしてゐる中に、結局酒落れた馬車と二頭立の馬を買ひ込んでしまふ。さうすると彼等の交際の範圍は次第に擴がつてゆく。かうしてとどのつまりは、十萬ルーブリかそれに近い現金を持つた、頤鬚を生やした親類のうようよついてゐる、ピアノの彈ける商人の娘と結婚するのだ。ただし、少くとも大佐くらゐにまで漕ぎつけない限りは、この光榮に浴せない。何故なら、ロシヤの鬚商人どのは、まだ幾らかキャベツくさい臭をさせてゐるくせに、將官か少くとも大佐でなければ、斷じて自分の娘を嫁にやらないからである。

以上がこの種の青年たちのおもな特質であるが、しかしピロゴフ中尉はそのほかに、彼獨特の才能をうんと持つてゐるのだ。彼は『*ドミートリイ・ドンスコイ』や『**智惠の悲しみ』の中の詩句を見事に朗誦するし、煙草のけむりを環に吹かす特技をも持つてゐる。その鮮かなことと云つたら、十の環を順々に糸に通すことも出來るくらゐである。それから、大砲は大砲で結構だが、犀は犀でまた値打があるといふ輕口噺を、面白おかしく聞かせるすべも心得てゐた。もつとも、運命がピロゴフに與へた才能を、一つ殘らず數へあげるのは些か困難である。彼は好んで女優や踊子の噂をしたが、しかし普通見習士官あたりの話しぶりほど剝き出しでない。彼は最近昇進された自分の官位に大滿足であつた。どうかすると長椅子に臥そべりながら、

「やれ、やれ、やれ！　空の空だ、何もかも空の空だよ！　僕が中尉だからつて、それがどうしたと云ふのだ？」

と云ふこともあつたが、內心ひそかにこの新しい官位がうれしくて堪らないので、話のあひだでも何氣なくそれを仄めかすやうに努めたものである。一度などは、往來で出會つた書記の態度

* オーゼロフの脚本、ドミートリイ・ドンスコイは十四世紀にドン河畔のクリコヴオ・ポーレで蒙古軍を擊破して、ロシヤを蒙古禍から救つたモスクワ大公。

** 有名なグリボエードフの戲曲

が生意氣に思はれたので、彼はさつそく呼び止めて、口數こそ少いけれども烈しい言葉づかひで、お前の目の前に立つてゐるのは中尉であつて、その邊にうようよしてゐるいい加減な將校ではないぞ、と云つて注意したものである。しかも、その折りちやうど澁皮のむけた婦人が二人通りかかつたので、なほさら雄辯を揮つてこの意味を徹底させようとした。概してピロゴフはすべて優美なるものに對して情熱をいだき、畫家のピスカリョフにも奬勵の態度をとつてゐた。もつとも、それはことによつたら、自分の男々しい容貌が肖像に描かれたところを見たかつたからかも知れない。しかし、ピロゴフの性質を語るのはもう澤山だ。人間といふものは、いちどきにその長所美點をのこらず數へ上げることの出來ないほど、靈妙なる存在物であつて、じつとよく觀察すればするほど、ますます新しい特色があらはれて來るから、それを述べ立ててゐたら際限がないだらう。

そこで、ピロゴフは絶えず見知らぬ女のあとをつけながら、時をり色んな問を持ちかけては、女を退屈させないやうにしてゐた。けれども、相手はほんの時たま、ぶつきら棒な答へ、といふより何か曖昧な音(おん)を立てるだけであつた。二人はカザン門を拔けて、町人街(メシチャンスカヤ)へ出た——煙草屋と雜貨屋、ドイツ人の職人とフインランドのニムフどもの街である。

ブロンドの女は足を早めて駈け出し、一軒のかなり汚れた家の門へ飛びこんだ。ピロゴフもあ

とにつづいた。女は狹い薄つ暗い階段を駈け昇つて、とある一つの戸口へ姿を消した。ピロゴフも敢然としてその中へ入つた。彼の目に入つたのは、壁の黑い、天井の煤けた、大きな部屋であつた。鐵の螺旋、鑢屋の道具、ぴかぴか光るコーヒイ沸し、燭台などが、ごちやごちやとテーブルの上に載つかつてゐる。床(ゆか)は眞鍮や鐵の鋸屑(おがくず)がいちめんに散亂してゐる。ピロゴフはたちまち、これは職人の住ひだなと曉つた。未知の女はそこから更にわきの戸口へするりと飛び込んだ。彼はちよつと思案したが、ロシヤ人の原則にしたがつて、前進をつづけることに決心した。つぎの間に入つてみると、これは手前の部屋に似ても似つかないほど、小ざつぱりと綺麗に飾りつけがしてあつて、主人がドイツ人であることを證明してゐた。彼は並はづれて奇怪な光景に接し、一驚を吃せざるを得なかつた。彼の前にはシルレルが坐つてゐた、——但し、『ウイルヘルム・テル』や『三十年戰史』を書いたあのシルレルでなく、町人街(メシチャンスカヤ)で有名なブリキ職のシルレルである。シルレルのそばにはホフマンが立つてゐた、——但し、作家のホフマンでなく、士官街(オフイツエールスカヤ)に住んでゐるかなり腕のいい靴屋で、シルレルとは大の親友である。

シルレルは一杯機嫌で椅子に腰をかけ、片足をばたばたさせながら、何やら熱くなつてしやべつてゐる。それだけならまだ大して吃驚することもないのだが、ピロゴフが驚いたのは、二人の男のとつてゐるいとも奇怪な姿勢であつた。シルレルは頭をぐいと反らし、かなり肉厚な鼻をつ

ん出して坐つてゐるし、ホフマンはその鼻を二本指でつまんで、そのすぐ上で商賣用の皮切り刀の刄をあちこち動かしてゐるのであつた。御兩人はドイツ語でしやべつてゐたので、ドイツ語は「おはやう(グーテン・モルゲン)」よりほか何も知らないピロゴフには、ことのいきさつが皆目わからうはずがなかつた。ところがシルレルの言葉は、結局かういふことになるのであつた。

「いやだ、おれは鼻なんか要らないんだよ！」と彼は兩手をふりまはしながら云つてゐた。「この鼻に、ただ鼻だけに月三斤づつの煙草が要るんだからなあ。おれは汚らはしいロシヤ人の店に、――だつて、ドイツ人の店にやロシヤ煙草なんか置いてないんだものな、――おれは汚らはしいロシヤ人の店で一斤について四十コペイカといふ金を拂つてる、――すると、しめて一ルーブリ二十コペイカだ。一ルーブリ二十コペイカを十二倍すると、十四ルーブリ四十コペイカになる。え、どうだい、ホフマン？　鼻だけに年十四ルーブリ四十コペイカかかるなんて！　おまけに、おれは日曜祭日にやラペーを嗅ぐことにしてるから、――だつて日曜祭日に下等なロシヤ煙草なんか嗅ぎたくないものな、――年に三斤のラペーを嗅ぐわけだが、これが一斤二ルーブリだぜ。六ルーブリに十四ルーブリ、――煙草代だけが二十ルーブリ四十コペイカだぜ！　こりや强盜にふんだくられるやうなもんぢやないか！　どうだい、え、ホフマン、さうぢやないかよ？」

御同樣に一杯機嫌のホフマンは、さうださうだと云ふやうに頷いて見せた。

「二十ルーブリ四十ペイカ！　おれはシュワビヤ生れのドイツ人だ、ドイツにやちやんとおれの王さまがいらつしやるんだからな。鼻なんか要らない！　鼻を切つてくれ！　鼻なんか取つちまへ！」

で、もし突然ピロゴフ中尉が姿をあらはさなかつたら、疑ひもなくホフマンはむざむざシルレルの鼻を切り落したに相違ない。何分にも、彼はまるで靴の裏皮でも裁たうとするやうに、早くも刀を斜(しや)に構へたのである。

シルレルは、見知らぬ男がこんな間のわるい時に入つて邪魔をしたのが、忌々しくてたまらないやうな氣がした。彼はビールと葡萄酒で陶然としてゐたにも拘らず、緣もゆかりもない他人の見てゐる前で、こんな恰好をしてこんな手術を受けるのが、いささか不體裁のやうに感じた。とかくする中に、ピロゴフはかるく會釋して、獨特の氣持ちのいい調子で話しかけた。

「失禮ですが……」

「うせろ！」とシルレルは言葉尻を引きながら答へた。

これにはピロゴフ中尉も度膽を抜かれた。彼はかうした應對ぶりに馴れてゐなかつたのである。彼の顏にちらと浮びかけた微笑は、とたんに消えてしまつた。品位を傷つけられたといふ思入れをして、彼はかう云つた。

「君、それは變ですな……君はきつと氣がつかなかつたんでせう……僕が將校だといふことに……」

「將校がいつたい何だ？　おれはシュワビヤ生れのドイツ人だぞ。おれだつて、」と、ここでシルレルは拳固でテーブルをどしんと叩いた。「將校になつて見せらあ。一年半で見習士官、二年で中尉だが、おれは明日にでもすぐ將校になつて見せるぞ。だが、おれは軍隊づとめなんかしたくないんだ。將校なんて、かうしてやらあ！」さう云ひながら、シルレルは掌を前へ出して、ふつと何か吹き飛ばすやうな仕草をした。

ピロゴフ中尉は、かうなつたらもう引き上げるよりほかないと見て取つた。とは云ふものの、彼の官服には餘りにも似合はしからぬこの應待ぶりは、不愉快なものにちがひない。彼は幾たびも階段に足を停めたが、それはシルレルに自分の失禮を思ひ知らしてやるためにはどうしたらよいかと、氣力をふるつて思案してゐるかのやうであつた。が、とどのつまり、シルレルは頭がビールと葡萄酒で一杯になつてゐるのだから、赦してやつて差しつかへあるまいと分別をつけた。のみならず、彼の目の前には愛くるしいブロンドの女房がちらつくので、とうとうこの事件は忘れてしまはうと肚を決めた。

次の日、ピロゴフ中尉は朝早く、ブリキ屋の仕事場へ姿をあらはした。入口の間で例の愛くるしいブロンドの女房が彼を出迎へた。そして、その顏にかなりよく似合ふ嚴しい聲で、

「何ご用です？」と訊いた。

「ああ、今日は、別嬪さん！　あんたは僕にお氣がつきませんか？　意地わる、なんて可愛い眼だらう！」

さう云ひさま、ピロゴフ中尉はいとも愛想よく一本指でその頤を持ち上げようとした。けれども、ブロンドの女房は慴えたやうな叫びを上げ、前とおなじきびしい聲で、

「何ご用です？」と訊いた。

「あんたを見に來たんですよ、そのほかに何の用もありません。」

と、ピロゴフ中尉はかなり愛想のいいほほ笑みを浮べながら、じりじりと傍へ寄つた。けれども、臆病なブロンドの女房が戸の中へすべり込まうとするのに氣がついて、附け足した。

「別嬪さん、僕は拍車を注文したいんですよ。一つその拍車をつくつて貰へますか？　せめてあんたを好きになるためだけにでも、實のところ、拍車なんかまるで要らないんだけれど、それより寧ろ轡の方がね。なんて可愛い手なんだらう！」

ピロゴフ中尉はかういふ風の話合ひになると、甚だ愛想がよかつた。

「わたしすぐに家の人を呼びますよ。」とドイツ女は叫んで、行つてしまつた。しばらく經つてピ

ゴフ中尉は、寢ぼけ眼をして出て來るシルレルに氣がついた。まだ昨日のふつか醉から滿足にさめてもゐなかつたのである。將校の姿を見ると、彼はぼんやりと夢のやうに昨日の出來事をおもひ出した。ありのままの形ではなんにも覺えてはゐなかつたけれども、なにか馬鹿げたことをしたといふ感じだけはあつたので、彼はひどくむづかしい顏をして將校をむかへた。

「十五ルーブリより安くつちや拍車の仕事は引き受けられないね。」と彼はピロゴフを追つ拂つてしまひたさにかう云つた。正直なドイツ人の常として、自分が見つともない恰好をしてゐるところを見た人間と差向ひになつてゐるのが、面伏せでたまらなかつたからである。シルレルは二三人の友達と隔てなく飲むのが好きで、人に見られるのが大嫌ひなため、さういふ時には自分の使つてゐる下職連中さへ入つて來ないやうに、扉に鍵をかけてしまふのであつた。

「なんだつてさう高いんですね？」とピロゴフは愛想のいい調子で云つた。

「ドイツ人の仕事だからね。」とシルレルは頤を撫でながら冷やかに云つた。「ロシヤの職人だつたら二ルーブリでも引き受けるでせうがね。」

「よろしい、僕が君を好いてる證據に、また君と近づきになりたがつてゐる證據に、十五ルーブリ奮發することにしませう。」

シルレルはいつとき考へ込んだ。正直なドイツ人であつてみれば、彼も少々氣がさして來たの

である。何とかしてこの註文を逃げたさに、二週間より早くは出來ないと云つた。ところが、ピロゴフは一口も文句を云はないで、一から十まで承知してしまつた。

ドイツ人はじつと思案に沈んで、どうかしてこの仕事を出來るだけ立派にやつて、本當に十五ルーブリの値打があるやうにしてやりませうと、さまざまに工夫を凝らしはじめた。

その時ブロンドの女房が仕事場へ入つて來て、コーヒイ沸しの一杯のつてゐるテーブルの上を搔きまはし始めた。中尉はシルレルが思案にしづんでゐるのを利用して、女のそばへ近づき、肩までむき出しになつた手をぎつと握りしめた。

これが大いにシルレルの氣に入らなかつた。

「マイン・フラウ（おい！）」と彼は呶鳴つた。

「ワス・ウォーレン・ジー・ドッホ（なんですの？）」とブロンドは答へた。

「ゲーエン・ジイ（行きなさい）、台所！」

ブロンドは出て行つた。

「ぢや、二週間ですね？」とピロゴフは云つた。

「さう、二週間たつたら。」とシルレルは物思ひに耽りながら答へた。「いま仕事がとても立て込んでるんでね。」

「さやうなら、また寄つて見ますよ！」
「さやうなら。」とシルレルは彼の出た後の扉を閉めながら答へた。
ドイツ女が明瞭に肘鐵砲を食はせてゐるにもかかはらず、ピロゴフ中尉は自分の野心を思ひ切らないことに決心した。自分の意に逆らふものがあらうなどとは、ふつふつ合點の行かないことであつた。まして愛想のいい彼の態度と華々しい官等は、女性の注意を惹くに充分の權利を彼に與へてゐるではないか。しかし、斷わつておかなければならないが、シルレルの女房は可愛い顏をしてゐるにも拘らず、ひどい薄のろだつたのである。もつとも、美しい女にあつては、智惠の足りないと云ふことも、特種な魅力になるものである。すくなくとも、私の知つてゐる澤山の良人は、自分の女房の頭のわるいのに大滿悅で、そこに嬰兒のやうな天眞爛漫を見いだしてゐるのだ。總じて美しい女の精神的な缺點といふものは、人に反感を起させないで、何といふことなく人を惹きつけるものである。惡德ですら、得も云はれぬ愛らしさに充ちてゐるではないか。もしこの愛らしさといふものがなくなつたら、女は人から愛情でないまでも少くとも尊敬をかち得るためには、男より二十倍も悧巧にならなくてはならない。
とは云ふものの、シルレルの女房は馬鹿とは云ひ條、いつも自分の義務にたいしては忠實だつたので、ピロゴフは自分の不敬な野望を實現するのに、かなり大きな困難にぶつかつたわけであ

る。しかし、障碍の克服はいかなる場合でも快感を伴なふものであるから、ブロンドの女房は彼にとつて、一日々々と興味ふかい對象となつて行つた。彼はかなり頻繁に拍車のことを訊きに寄るやうになつたので、到頭シルレルはうるさくて堪らなくなつた。彼は少しも早くこの註文を仕上げようと懸命になつたので、つひに拍車は出來あがつた。
「いよう、何てすばらしい細工だ！」とピロゴフ中尉は拍車を見て叫んだ。「いやはや、實にうまく出來てるわい！　うちの將軍閣下だつてこんな拍車はもつてをられんよ。」
滿足の色がさつとシルレルの顏に漲つて、その眼はかなり愉快さうな光を帶びて來た。彼は心の中ですつかりピロゴフと和解してしまつた。
『ロシヤの將校つて賢い人間だ。』と彼は肚の中で考へた。
「ぢや、なんですな、君は、たとへば、匕首とか何とか云ふやうなものの鍔もしてくれますね？」
「ああ、そりや出來ますとも！」とシルレルは微笑を浮べながら云つた。
「それぢや、一つ匕首の鍔をしてくれたまへ。持つてくるから。僕はとても素的なトルコ風の匕首を持つてゐるんだけれど、そいつに別の鍔をつけたいんでね。」
シルレルはこれを聞いて、爆彈でも見舞はれたやうな氣がした。彼の額にはとつぜん深い皺が寄つた。

『こいつあしまつた！』と心の中で考へながら、彼は餘計な仕事を背負ひ込むやうに仕向けた自分を、内心のろはずにゐられなかつた。しかし、かうなつた以上、もう斷わるのは不躾けだと思つた。おまけに、このロシヤの將校は自分の仕事を讃め上げたではないか。しばらく頭をひねつた後、彼はとうとう引き受けてしまつた。けれども、ピロゴフが歸りしなに圖々しくも、美しいブロンドの唇の眞上に接吻したのを見て、彼は深い疑惑にとらはれたのである。

筆者は、ここでシルレルの人となりを、もすこし詳しく讀者に御紹介するのも、無益のわざではあるまいと思ふ。シルレルは、この言葉のもつとも完全な意味における典型的なドイツ人であつた。まだ二十歳くらゐの時から、つまりロシヤ人ならまだ無我夢中で暮してゐる幸福な時代に、早くもシルレルは自分の生活をちやんと規程してしまつて、如何なる場合にも例外などといふものを認めなかつた。彼は朝七時に起きて、午後の二時に晝食をすることに決め、萬事につけて正確を旨とし、毎週日曜日にはかならず醉つぱらふことにしてゐた。彼は十年間に五萬の財産をつくることに決心してゐたが、それは運命と同樣どうにもならない絶對なものであつた。といふのは、たとへロシヤの官吏が自分の長官の玄關番の部屋を覗くのを忘れることがあらうとも、ドイツ人が自分の誓ひに背くやうなことはあり得ないからである。彼は金輪際、自分の出費をふやすやうなことをしない。もしじやが薯の相場があまりひどく上ると、彼は食費を一コペイカも增額

しないで、ただ食べる方の量をへらすだけである。時には空き腹をかかへてゐるやうなことがあつても、すぐ馴れつこになつてしまふのだつた。かうした杓子定規は、自分の女房ですら一晝夜に二回以上は接吻しないことに決めるといふ、そんな程度にまで及んでしまつた。ひよつと餘分に一度でも接吻したらいけないと云ふ用心に、彼はスープの中にも決して茶匙一杯より上は胡椒を入れないやうにしてゐた。たゞし、日曜日にはその規則もさほど嚴格には守られない。といふのは、日曜にはシルレルはビールを二本と、いぶきぜり入りの酒を一本飲むからであつた（その癖、彼はこの酒を何時もくそみそに惡く云ふのであつた）。彼の飲み方はイギリス人などとはすつかり變つてゐた。イギリス人は食後すぐに部屋の戸にぴんと鍵をかけて、ひとりでへべれけに醉つぱらふのだが、ドイツ人である彼はその反對に、いつも靴屋のホフマンか指物師のクンツと一緒に、興に乘じながら飲むのであつた（クンツといふのもやはりドイツ人で、相當な呑助だつた）。つひに甚だ厄介な事情に追ひ込まれたシルレルといふ男は、まづかういつた性質の人間であつた。彼は冷靜なたちで、おまけにドイツ人であつたにも拘らず、ピロゴフの行動は何かしら嫉妬めいた感情を彼のこころに呼びさました。彼はしきりに頭を捻つたが、どうしたらこのロシヤ將校を厄介拂ひしたものか、いい分別がつかなかつた。

一方ピロゴフは、將校仲間の一座でパイプを燻らせながら、――何故といつて、將校のゐると

ころでは、必ずパイプが附きものとなるやうに、神様が取り計らはれたからなので、――將校仲間の一座でパイプを燻らせながら、氣持のいい微笑を浮かべて、意味ありげに、美しいドイツ女との色事をほのめかしてゐた。彼に云はせれば、二人はもうすつかり隔てのない間柄になつてゐて、もう本當にまんまと手に入れてしまへさうな形勢なのであつた。

ある日、コーヒイ沸しやサモヴールを描いたシルレルの看板が幅をしてゐる建物を見つめながら、ピロゴフは町人街(メシチャンスカヤ)をあちこち歩いてゐた。すると、何といふ嬉しいことか、窓から乘り出すやうにして往來の人を眺めてゐるブロンドの顏が目に入つた。彼は足を停めて、小手招きしながら、「グーテン・モルゲン」と云つた。ブロンドは知り人同志として會釋した。

「どうです、御主人は家ですか?」

「家ですわ。」とブロンドの女房は答へた。

「日曜は留守になりますの。」と薄のろのブロンドは云つた。

『こいつは悪くないぞ。』とピロゴフは肚の中で考へた。『この機に乘ぜざるべからずだ。』

そこでつぎの日曜日に、忽然としてブロンドの前に姿をあらはした。シルレルは本當に家にゐなかつた。可愛い主婦はびつくり仰天した。しかし、ピロゴフも今度はかなり愼重な態度をとつて、頗る慇懃にふるまひ、會釋をしながら、ぎゆつと引きしまつたしなやかな姿の美しいところ

を殘りなく相手に見せたのである。彼はじつに氣持のいい、しかも丁寧な調子で冗談を云つたが、薄のろのドイツ女は何と云はれてもその答はただ「はい」とか「いいえ」とかの一點張りであつた。あれこれと手を盡くした擧句、てんでこの女に食ひ込む方法はないと見極めをつけた彼は、ダンスをしようと申し込んだ。ドイツの女は誰でもダンス好きなので、ブロンドの女房もたちまち承諾した。ピロゴフはこの一手に多大の希望をつないだ。第一に、これは彼女に滿足を與へるわけだし、第二に、これは彼の妙技と訓練された身のこなしを女に見せることになるし、第三には、ダンスの時にはこの上もないほど親密に接近することが出來る。ドイツ女をしつかり抱いて、これをもつて一切の端緒とすることが出來る。手つとり早く云へば、彼はかうなつた以上、大願成就ときめ込んだのである。ドイツ女には短兵急は禁物といふことを承知してゐるので、彼は何かのガヴォット曲を口ずさみはじめた。可愛らしいドイツ女は部屋の眞中へ進み出て、一方の美しい足をもち上げた。この姿勢に有頂天になつてしまつたピロゴフは、いきなり飛びかかつて接吻した。ドイツ女は叫び聲を上げたが、ピロゴフの目にはそれがなほ女の魅惑を增すのであつた。彼はところ構はず接吻した。と、不意に扉があいて、シルレルがホフマン、クンツを伴れて入つて來た。この尊敬すべき職人たちは、へべれけに醉つぱらつてゐた。

ところが……しかし筆者(わたし)は、シルレルの激怒と憤慨の程度については、讀者自身によろしく御

判斷をねがふとしよう。

「この無作法ものめ！」と彼は烈火のごとく憤つて叫び出した。「よくもひとの女房に接吻なんかしやがつたな！　てめえはやくざものだ、將校なんかぢやありやしねえ、忌々しい！　なあ、ホフマン、さうぢやないか？　おれはドイツ人で、ロシヤの豚とはちがふだらう？」

ホフマンはさうださうだと云ふやうに頷いた。

「ええ、おれは額に角*なんか生やされるのは眞平だ！　おい、ホフマン、こいつの襟つ首を引つつかまへろ、おれは默つてをられん。」と彼は兩手を振りまはしながら續けたが、さう云ふ顏はまるで彼のチョッキの緋羅紗そつくりであつた。「おれは八年もペテルブルグに住んでゐて、シュワービヤには母親もゐるし、ニューレンベルグには伯父貴もゐるんだぞ。おれはドイツ人で、角なんか生やした牛肉とちがふんだからな！　ホフマン、この野郎の着物をみんな引つぺがしてしまへ！　クンツ、こいつの手と足を押へてをつてくれ！」

かうしてドイツ人たちは、ピロゴフの手足を引つ摑まへた。

彼は身をのがれようとしたが、無駄だつた。この三人の職人は、ペテルブルグに住むドイツ人の中でも、屈強無比の連中だつたので、思ふ存分、遠慮會釋なしにピロゴフを手ごめにした。そのひどいことと云つたら、筆者はこの悲しむべき出來事を描寫するに言葉を知らぬほどである。

筆者は信じて疑はないが、シルレルはその翌日はげしい熱病に見舞はれたに相違ない。今にも警官がやつて來るかとびくびくもので、風に吹かるる木の葉のやうに慄へながら、昨日の出來事を一場の夢にしてしまへるならば、どんな値を拂つても厭はないと思つたにちがひない。しかし、もう出來てしまつたことは今さらどうにも變へやうがないのだ。

ピロゴフの忿怒と憤りは譬へるにものもないくらゐであつた。あの恐ろしい侮辱のことを考へただけで、彼は氣も狂はんばかりであつた。笞刑もシベリヤ流刑も、シルレルにとつてはいふに足らぬ輕い處罰のやうに思はれた。彼は飛ぶがごとく我家をさして走つた。すぐに着換へをして、そのまま將軍のところへ出かけ、ドイツの職人どもの亂暴狼藉を目に見るやうに詳しく報告しよう、とかういふ心算だつたのである。彼は同時に參謀本部へも請願書を呈出しようとおもつた。もし求刑が自分にとつて不滿足なものであつたら、何處までも上訴してゆかう。

ところが、この事件はなにか妙な具合に臭がついてしまつた。途中、彼は喫茶店へ寄つて、肉饅頭を二つぺろりと食べ、『北方蜜蜂』の記事を拾ひ讀みして外へ出たときには、もうそれほど腹も立つてゐなかつた。そのうへ、かなり涼しい風に誘はれて、彼は少しばかりネーフスキイ通を散歩した。九時頃にはすつかり氣持が落ちついてしまつて、日曜日に將軍を騷がすのはよろしく

* 日本では額の角は燒もちを燒く意味で用ひられるが、西洋では女房に姦通されることを意味する。

ないと反省した。のみならず、將軍はきつと何處かへ呼ばれて行つてるに相違ない。かういふわけで、彼は檢閲委員會の會長の宅で催された夜會へ出かけることにした。そこには彼と同じ隊の將校や官吏が大勢ゐて、なかなか氣持のいい集まりであつた。彼はそこで樂しい一夜を過し、しかもマズルカでは素ばらしい腕前をあらはして、婦人連ばかりか男の仲間さへあつと云はしたものである。

「この世の中はなんと不思議に出來てゐることだらう！」と、筆者は一昨日ネーフスキイ通を歩き歩き、右に述べた二つの出來事を思ひ浮かべながら、こんなことを考へたものである。「運命がわれわれを飜弄することと云つたら、じつに奇妙だ、ふつふつ合點が行かない！　一體われわれは自分の望むものを何時か手に入れることがあるだらうか？　ことさらそのために力を投げられてゐるやうに思はれるものの、それが果して我々のものとなる時があるのだらうか？　何もかもが逆になつて行く。ある者は運命から立派な馬を授かつてゐながら、一向その美しさに氣もつかずに、のほほんとしてそれを乘りまはしてゐる。かと思へば、ある者は全身愛馬の熱に燃えてゐながら、いつもてくてく膝栗毛で外出し、見事な逸物がそばを曳かれて行くの見ては、おもはず舌を鳴らすだけで滿足しなくちやならない。またある者は素敵なコックをかかへてゐるけれども、殘念ながらあんまり口が小さいので、どうしても一片以上は入れることが出來ない。ところが、

ある者は參謀本部の拱門ほどの口を持つてゐながら、悲しいことには、ドイツ式のじやがいも料理で我慢しなければならない。運命のわれわれを飜弄すること、どうしてかくも奇怪千萬なのだらう！」

しかし、何より奇怪なのはネーフスキイ通で起る出來事である。おお、このネーフスキイ通を信用してはいけない！　筆者はこの街を通る時には、出來るだけしつかりとマントに身をくるんで、出あふものを一切見ないやうにしてゐる。何もかもが僞りである。何もかもが空想である、何もかも見かけとは別なものである！　諸君はあの見事な仕事の上衣を着て散歩してゐる紳士を大變な金持と思つてをられるだらう？　ところが大ちがひ、あれはあの上衣だけのしろ物なのだ。諸君はあの普請中の教會の前に足を停めた二人の肥つちよが、教會の建築を論じてゐると想像されるだらう？　とんでもないこと、彼等は二羽の鴉が變なふうに向かひ合つて止つた、と云ふ話をしてゐるのだ。諸君はあの兩手をふりまはしてゐる感激家が何を喋つてると思はれるか？　彼の細君がまるで見も知らぬ將校に窓から珠を拋りつけたといふことか？　大ちがひ、彼はラフアエットのことを喋つてゐるのだ。諸君はいつたいあの婦人たちが……しかし、婦人たちにはてんから信用してはいけない。それから商店の飾窓もなるべく覗かないやうにしたまへ。そこに陳列してある小間物雜貨は、なるほど美しいには相違ないけれども、そこには紙幣のものすごい大束

の匂がぷんぷんしてゐる。それより最もつつしむべきは婦人たちの帽子の下を覗き込むことである。晩、美女のマントがどんなに魅惑を發散しながら飜つてゐても、筆者はもの好きにそのあとを踪けて行くなんてことは金輪際しない。街燈からなるべく、なるべく遠く離れることだ！　なるべく早く、出來るだけ早くそばを通り抜けてしまふことだ！　街燈の臭い油で洒落れた上衣を汚すくらゐで厄のがれが濟んだら、まだしも仕合せなくらゐである。しかし、街燈ばかりでなく、何もかもが虚僞で息づいてゐるのだ。このネーフスキイ通といふやつは、のべつ嘘をついてゐるけれども、しかしその最もはなはだしいのは、夜が暗い影をその上に落して、家々の白い壁やクリーム色の壁をくつきりと浮き出させる時である、全市が雷のやうな轟きと耀きに化し、數知れぬ馬車が橋の上を疾走し、馭者が馬の上で跳りあがりながら喚き立て、萬象を本當とは異なつた姿に見せんがためのみに、惡魔が手づから灯りを點ける時である。

解　説

ニコライ・ゴーゴリ（一八〇九――一八五二年）は長篇『死せる魂』喜劇『檢察官』の作者として高名であり、從つてロシヤの生んだ最も偉大な諷刺作家とされてゐる。とは云へ、同じく卓越した諷刺作家であるサルトゥイコフ・シチェードリンと比較すると、兩者の作品から受ける感銘には著しい相違がある。シチェードリンは徹頭徹尾、冷靜な觀察者としての立場を離れることなく、嚴正な態度で社會と人間の惡を追求し、周匝な用意をもつて己れの戟を僞裝しつつ、狙ひたがはす敵の急所を突く、云はば純粹の諷刺家であつて、作家としての態度手法は飽くまで客觀的であり、理性的である。作品の中に烈しい感情や情熱を洩らすなどと云ふことは絶對にない。

それに比べると、わがゴーゴリは實に何と驚くべき對照をなしてゐることか！　彼は情熱家であり、感激家であり、空想家であり、詩人であると共に、宗教的感情に充ち溢れた神祕家でさへある。彼の内部世界はつねに沸騰し動搖してゐて、その行爲は屢々奇驕に走り、常軌を逸することが多い。從つて、ゴーゴリの作品から受ける印象は冷靜とか平穏とかいふものとは、およそ緣遠いものである。彼の性格は、シチェードリンのごとく單なる觀察者、批判者として終始すべく、あまりにも分裂し、均齊の欠けたものであつた。

ゴーゴリの笑ひは内部から自然と爆發する噴火山的な烈しさを持つてゐて、いつたん頭腦を經て滲み出る觀のあるシチェードリンの笑ひとは、根本的にその性質を異にしてゐる。それは何故か？　ほかでもない、ゴーゴリが自分自身の内部に夥しく滑稽なもの、醜いもの、卑賤なるものを藏してゐて、周圍の人間社會のさうした否定的分子に對する感覺が、異常なまでに鋭敏だつたからである。彼が他人を笑ふのは、取りも直さず己れ自身を笑ふのであつて、その笑には悲痛な涙が隱されてゐる。からした内部の矛盾相剋が、氣狂ひじみるほどの哄笑となつて爆發するのである。

「私は笑ひを武器として世の惡と戰ふのだ。」といふ意味のことをゴーゴリは自ら云つてゐるが、この惡は彼に

あつては專ら卑小、陋劣、醜惡、滑稽なるものに限られてゐたと云つてよい。而してその惡は、賤しむべき小惡魔によつてシンボライズされてゐた。ゴーゴリはたゞに抽象的觀念としてのみならず、生々しい實感として惡魔の存在を信じてゐた。彼が『死せる魂』第二部の原稿を火中に投じて悶死したのも、この惡魔を相手の血みどろな鬪ひに破れたのである。故郷小ロシヤの民間傳說を主題とした彼の出世作『ヂカンカ近郷夜話』が、惡魔、怨靈、妖怪譚集の觀を呈してゐるのも、偶然ではないのである。もつとも、この頃は青年ゴーゴリに取つて、惡魔はたゞの外面的なものに過ぎず、彼の魂に深く食ひ入るには到らなかつたけれども、彼がこれ程までにかうしたテーマに牽引を感じたといふことが、單なる郷土愛や土俗的な興味以上に深い原因の存在してゐることを示してゐるではないか。

『降誕祭の前夜』はこの『ヂカンカ近郊夜話』第二篇に收錄された物語であつて、書中の他の物語と同樣に、作者の故郷であるウクライナ民衆の風俗、習慣、氣質、傳說、信仰が、鮮明な筆で生かされてゐると同時に、前に述べた超自然的なものに對する牽引が、典型的な形で表現されてゐる。この作品に描かれてゐる惡魔は、人間の生活に害をなさうとして、かへつて人間のために翻弄され頤使される、みじめで、滑稽の存在物として取扱はれてゐる。それがこの作品の中へ、ゴーゴリの藝術の最大の武器であるユーモアを存分に導入する契機となつてゐる。それは恰も青年ゴーゴリが、事實笑ひによつて人生の惡を征服し得るものと、信じてゐたかのやうである。

『ヂカンカ近郊夜話』の成功に勵まされたゴーゴリは、引きつゞきその續篇の性質を帶びた短篇中篇集『ミルゴロド』を世に問うた。こゝに收めた『昔氣質の地主達』はその一篇である。おなじくウクライナの田舍が舞臺となつてゐるけれども、こゝには『降誕祭前夜』に見られたやうな、村の若者や少女達の賑かな踊や歌もなければ、戀愛もなく、異常なアヴンチュールもない。それは平凡な年とつた地方地主の平凡でじみな、なんの

變化もない生活と死を叙したものである。ロシヤ文學において、プーシュキンは廣義における現實主義の祖であるが、しかし一般にはゴーゴリがロシヤ文學に於けるレアリズムの樹立者と呼ばれてゐる。といふのは、プーシュキンの散文小說は常にストーリイを伴つてゐて、物語の興味といふものを度外視することが出來なかつたのに反して、ゴーゴリはこの作品に見らるゝごとく、なんの奇もない平凡人の生活の一片を切り取つて讀者に示すと云つた行き方を試みたからである。

しかし、生活の單なる外面的描寫と云ふだけの意味ならば、この程度の作品がそれほど大きな價値を持つことは出來なかつたかも知れないが、これは一片の生活報告ではなくて、ゴーゴリの一面である詩人としての素質が、瑣末な家常茶飯事的な描寫や叙述の間を幽婉なリリシズムとなつて流れながら、神のごとく善良で單純な老夫婦の魂を浮き出させてゐるところに、この作品の特殊な魅惑が存してゐるのである。

しかし、この平凡で家常茶飯事的な世界も、ゴーゴリの手にかゝると、やはり超自然的なものから自由であることは出來ない。彼は老いたる地主の死を物語るに當つて、亡き妻の呼聲、――死神の呼び聲をその動因とし、眞晝の靜寂の中にひゞくこの呼び聲の恐ろしさを强調してゐる。これを讀んでゐると、恐らくゴーゴリ自身も死の數ケ月前、あるひは數年前から、ローマで彼の腕に抱かれて死んだ若き親友ギェリゴールスキイの呼聲を聞いたのではあるまいか、といふ想念が浮んで來るのを禁ずることが出來ない。かういふ深い複雜な內部生活をもつてゐたゴーゴリが、その表面的なトリヰアリズムのために、一時批評家から自然主義作家、――ナチュラリストと呼ばれたことがあつたとは！

『狂人日記』は『ネーフスキイ通』とおなじく、『ミロゴロド』につゞいて出版された『アラベスク』中の數多からぬ創作の一つである。これは有名な『外套』と共にゴーゴリの創作における新しい領域の開拓を意味するもので、單にゴーゴリの藝術のみならず、ロシヤ文學にとつても重要な道標となつた。ほかでもない、これ

らの小説によつて、ロシヤ文學は初めて田園的地主的世界から踏み出して、都會性を取り入れたのである。それは單に都會を舞臺とし、冬のシーズンだけ都會の邸宅で過す貴族地主を主人公としたのでなく、都會に縛りつけられてその桎梏から脱け出すことの出來ない、下層の官吏や、町人や、貧しいインテリ層などの特殊な世界と氣分を對象としたのである。この點に於けるゴーゴリの功績は大きなもので、正しく彼はドストエーフスキイの先驅者と云はれる當然の權利を有してゐる。

その意味で『狂人日記』は最も典型的な作品であらう。自卑と自尊と、相反せる二つの心理の相剋に、次第に發狂してゆく一個の人間の痛ましい歴史が、僅かな言葉で見事に描破されてゐる。ドストエーフスキイの『分身』は同じテーマの敷衍であり、ヴリエーションである。長官の令嬢に懸想するといふモチーフさへも、同樣に取り上げられてゐる。ドストエーフスキイは主人公の内的分裂の心理を明瞭にし、藝術的システムにまで高めたけれども、しかし『分身』は冗長に墮して、效果に於いて失ふところが多く、『狂人日記』の簡潔にして、しかも一種の鬼氣と悲痛の味ひに充滿し、かつそのうへユーモアの横溢してゐる『狂人日記』の藝術的完成味には及ばない。

『ネーフスキイ通』もやはりペテルブルグ物の一つであつて、同じく都會が人間に與へる心理的影響を取り扱つてゐるけれども、作品そのものの持つてゐる味はひは全く別種なものである。こゝでは灰色のペテルブルグの風物と、貧しい裏街の侘しい住ひが、繊細な神經をもつた青年をラスコーリニコフ的空想の世界へ追ひやるのだが、浪漫的時代の畫家ピスカリョフにあつては、この空想は叛逆や犯罪の方向へ向かないで、美に對する憧憬となつて凝集したのである。ペテルブルグの凍つた霧の中から、街燈や、馬車や、商店の飾窓の間に立ち現はれた美しき貴女、神々しい永遠の處女の幻影は、後にブロークによつて繰り返し歌はれたテーマであつて、その抒情詩劇『見知らぬ女』は、まさしくゴーゴリの『ネーフスキイ通』の近代化とさへ云はれるだらう。

しかし、から云つたからとて、ゴーゴリのこの作品が古めかしい過去のものだと云ふつもりでは更らにない。否、そこには何といふ新鮮な現代的なものが脈打つてゐることか！　ゴーゴリはドストエーフスキイに先んじて、早くもペテルブルグといふ街の幻想性を感じ取り、神祕と紙一重の現實を啓示した。又そこには都會生活の壓迫が、貧しい敏感な人間に對して如何に破滅的な影響を與へるかが、恐ろしい程の力をもつて描かれてゐる。ラスコーリニコフを滅したものは、自己の内部にナポレオンの代りに一匹の虫けらを見出した幻滅感であつたが、ピスカリョフを自殺にまで追ひやつたのは、天女のごとき貴女の代りに無恥な娼婦を發見した絶望なのである。

この作品の中では、小兒のごとく純眞で無垢なピスカリョフに對して、第二の主人公ピロゴフが對立させられてゐる。これは無恥厚顏で、自惚れの强い、鼻持のならぬ俗物の典型である。殆ど小説的な事件らしいものもない單純にアネクドート風な物語の中に、特に肉饅頭を二つ食べて、骨肉に徹する侮辱感をけろりと忘れてしまふ淡々たる叙述の中に、この不滅の典型を生かし切つた手法は、ドストエーフスキイをして讃嘆の辭を惜ませなかつたものである。

米川正夫

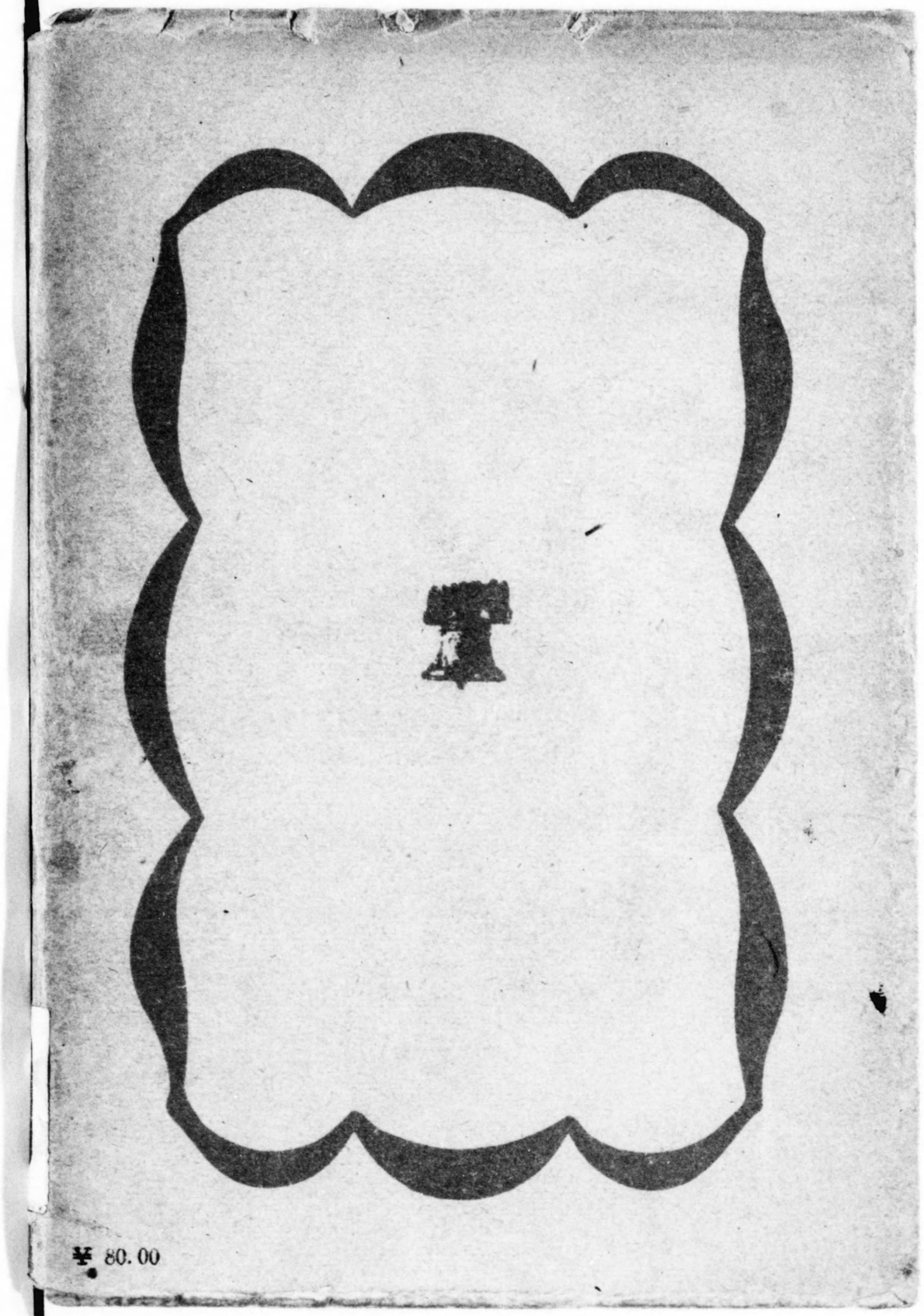
昭和二十三年三月廿日　印刷
昭和二十三年四月一日　發行

譯者略歷
明24・11・25岡山縣高梁町生
東京外語露語科卒
前明治大學文藝科、早稲田大學露文科講師
譯著書
トルストイ全集、ドストエーフスキイ全集、ロシア文學史等々譯著書多數

世界文學叢書——25
狂人日記

定價　八拾圓

譯者　米川正夫
發行者　柴野方彦
印刷者　河北喜四良
印刷所　京都市左京區淨土寺南田町一〇八　河北印刷工業所
發行所　日本出版協會員番號B二一九〇六七　株式會社世界文學社
京都市下京區烏丸屋町通四條下ル
電話下京　六〇〇八・六〇〇九番
振替京都二五六二二番
配給元　東京都千代田區神田淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

落丁、亂丁は何時でもお取替へします

終